
走る僕らの青春コード

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走る僕らの青春コード

【Nコード】

N0706A

【作者名】

K

【あらすじ】

ルーズリーフに徒然書いた、複雑な僕らの青春コード。屋上から見上げた空、黒い鍵盤とか繋いだ手、君が覚えていなくても、全部僕が覚えてる。シリアスもコメディもあり、私立高校が舞台の“僕ら”の青春論。がついているものは本編（B^{ノーマル}L）では準本編。それ以外は番外編。（βがついているものはB^L要素がちらほら（苦笑））

1. I think・アイ ウォント・あーど

5月の突き抜けるような青空に
トリップしてみたいって思わないかい？

I think・アイ ウォント・

あーど

「たっけー」

背中ではガシャンとフェンスが鳴く。

まだ夏じゃねえのにじめじめしたこの暑さ、お天道様は気が早い
ね！気が早い男はモテないZe（消え去れ）

足元には俺の足1つと半分くらいのコンクリの足場。そのむこう
にはじわじわ熱を発する波だたねエ黒コンクリの海。

温度が上がってくそこにダイブすんのは勘弁だけど、

「サファイアみてエな空だなあって俺ポエマー？」

正しい日本語使えねー男子コーコーサーがパチポエマーになるく
らい青い空にトリップすんのは悪くない。

べつに自殺願望なんてねーけどさ。

でも死ぬ直前に見るのが5月の青空なんつーのは、青春クさくて
いいと思う。

「飛んでみつか？」

やったらぜってー死ぬけどよ。

あ、遺書とか書いてねーや。ま、いつか、残すモンなんて俺の全
財産53万4029円（貯金込み）と森田さん^{ママチャリ}二号とマイルームく
れえだし。

「そいでは、いざ」

こんな簡単に自殺できるなんて、お手軽な世の中だなー。もうオ

サラバだけどサ。

足場のコンクリのふちに足をかける。待って上がれ五月晴れ。

ガチャン

「何やってんの」

タイミングよく邪魔してくれたのは、両手ポケットに突っ込んで仏頂面にフチなし眼鏡で黒髪のコートセーくん。

「ナイスタイミング君は今ひとつの貴い命を救ったよ」

しかし今は5限目ですヨコートセーくんが何やってんのさ。

「自習になったから昼寝でもしようかと思つて」

「エスパーがお前!？」

「そんな暑い所にいるから頭沸いた?全部口から出てるよ」

「…」

おい俺。しっかりしろよ。

コートセーくんはフェンスのむこう側の俺の右隣に座つて背中を預けて、ポケットから何かひっぱりだした。タバコの箱2つくつつけたくらいのサイズの。

「いちごカフェオレ…」

好きなんなあ。

「人の好みに口出しするなんて趣味悪いねというよりも外見で人を判断するなんてナンセンスだね。そう思わない?」

「スミマセン…」

いたたまれない気持になるのは何故でしょう。(さあね)

つてかコートセーくんどこで息継ぎしてんの。なんですかあな
たは素潜りの名人ですか、海女ですか。俺も熱海で7年くらいの修
行積んだらできるようになりますか。

「海女じゃないから。ってかアンタは無理だと思う」

「…」

また口から漏れてたのか。口チャックでも買すべきか。どらえもおおん。

「で、アンタは？自殺志願者？」

「いえいえ、青空トリップ志願者です」

「頭いつもトリップしてんだから必要ないじゃん。アンタのクラス5限目数学でしょ？でなくていいわけ」

「うわ失礼。そういうユートーセーくんのクラスは」

「自習ってさつき言ったよね？（につこり）」

「ス、スミマセン」

体を反転させてユートーセーくんを見ると、こっち見ないでいちごカフェオレを飲んでいるその顔に、雲が影を落としてる。

「なんで自殺？」

ストローをくわえたまま唇を動かしてるくせに、その発音は嫌にはつきりしてた。

「トリップですよ」

「なんでトリップ？」

「なんとなく」

日常の中に渦巻く欲望は、ときたま抑えられないことがある。どろつともれたその行き先が青空トリップ。

「生きてる意味ってあんのかなーと思って、なんとなく死んでみようかと」

「自殺にありがちな理由だねつまんないよ」

「失礼な」

ぢゅるると音をさせて全部飲み終わったユートーセーくんは、ストローから口を離してにやっと笑った。

「なんとなく死ぬるんならなんとなく生きてみれば？白石ユウヤ」

ユートーセーくん・麻川アキのその策略家じみた屈託のない（矛盾）笑顔は、青空ダイブより青春クさかった。

何より俺の名前を知っていたコトが驚きだけど、まあおもしろいからいいか。（いいのか（いいんだよ））

「麻川アキくん」

「（名前知ってたのか）何」

「責任とってくださいね」

「いいけど別に」

青空にトリップすんのは、もう少し先になりそうだ。

1・ I t h i n k・アイ ウォント・あ ばーど（後書き）

初めまして。特別連載を意識しているわけではありませんが、ル
ーズリーフに徒然書いた青春コードを投稿させていただきます。

アキとユウヤの微妙な掛け合い（は？）と恋の駆け引き（はあ？）
をどうぞ作者ともども温かく見守っていただけると嬉しいです。

まだまだわからないことだらけなので、御指導御鞭撻のほど、ど
うぞよろしく願います。

2・だけどそれはまだ、秘密。

β

なんで走っているかって？
自由な鳥になりたいからさ！

だけどそれはまだ、秘密。

そんなステキな理由はない。

走ったりしなくたって、頭は常に大空を旅してマス。

じゃあなんで走っているかって？

そりゃあキミ、生物の条件反射。

「藤宮力オル！待てゴルアアアア！！！」

追われているからです。

ああまるで俺達トムと。エリー（ばればれ伏字）。なんの偶然か
追う古文教師の名は黒猫ツトム。

「センセー、こういう場合待ちませんから普通」

「（無視）これで通算35回目のサボりだ。なのになんだお前のテ
スト、カンニングか！？」

「（うわシカトかよ）先生ひどいや！生徒を疑うなんて」

「疑わしきは真っ黒。鳴かぬなら脅して鳴かせるホトトギス。これ
が俺のモットーだ！」

「そんな人生つまないでしょうに……。だからフられるんですよ」
「黙れ」

結局2時間耐久隠れ鬼の末に俺はトムにつかまり、生徒指導室に
連行された。

通いなれたそこに待っているのはマイ・スウィート・ハニィ あ

あまるで俺健気な通い妻。

「藤宮ッ！」

ドアを空けたら案の定、身長180cmの俺を睨むように見上げてくる小学生男子。もとい俺の担任。

そうざす、泣きそうな顔でこつちを睨みつけるシュガーボーイ（死語）は佐藤アオイと言う名前の担任です。男です。

そつだよ男だよ、今俺がそつこんの男だよ！なな、何が悪いか、いいだろ可愛いんだしYO！（一人逆ギレ）

「お前今回で古文のサボり何回目だッ」

「センセが泣かした女の数」

「そんなにたくさんの人と付き合ってねエ！」

「じゃあセンセを泣かした男の数」

「そつちの趣味もねエ！」

うわズバつと。ちよつと俺傷ついたよ。でもゴメン涙目で怒鳴らないで俺健康な思春期男子コーコーサーだから。（変態め）

「大体お前こんなんでもーするつもりだよ。卒業後の進路は？」

「うちのラーメン屋継ぐー」

「数学できなきゃ困るだろ」

「足し算引き算できれば十分。ダメならデキる子お嫁にもらっ」

できる子。

目の前にいんじゃない俺。

「センセ、うちに嫁にこない？」

「俺ラーメン嫌い」

「そつちかアアアア！（ガーン）」

「チャ、チャーハンは？」

「好き！食いたい！」

むしろあなたを喰いたいです。（消え去れ）

「あー、でもダメだなあ。日本は同性結婚認められてねーし」

認められてたらいんですか。

それなら俺今から森総理に会ってくるぜ！あれ、今の総理って森だっけ。クリントンだっけ。

「俺もやだし」

さらっと付け加えるなアアアア！！（ガイン）

「そうかー、親継ぐのかー。じゃあなんでもっと上手くやんねーの？俺無駄骨じゃん」

それは俺がセンスを好きだから、
長い時間ヒトリジメしたいんですヨ。

言ってやりたいけどまだいわねー。

今のところはまだ“手のかかる生徒”でいてやるよ。

だから、覚悟してあがれ。

いつか絶対奪ってやる。

ちょっとしたヲトメのような、好きな子をいじめるガキ大将のよ
うな気持。

俺の中でしめるセンスの割合とか、好きだって事実。
今はまだ、俺の特A級の秘密。

ほんととは言ってやりたいけど、

だけどそれはまだ、秘密。

2 . だけどそれはまだ、秘密。

β (後書き)

後から考えると無茶苦茶で、

噴出さずにはいられないけど、

この時はそれが一生懸命だった。

理屈じゃないんだ、この感情。

3 . 空とぶケモノ・A

「麻川アキくん」

「何」

「藤宮力オルは我等が担任佐藤アオイ通称シュガーくんが好きなんじゃないかと思うんですけどどうでしょう」

「そうなんじゃないの」

「先生と生徒ってアブナイですね」

「そーだね」

「…アキくん」

「何」

「そこに愛はありますか？」

「馬鹿は嫌いです（にっこり）」

「（ヒイ）」

空とぶケモノ・A

「人間はねー、昔は飛べたらしいですよ」

「へえ」

「そんなカンジの骨の跡があるんだそーで」

「へえ」

「なんで飛べなくなっただんでしょーね」

「へえ」

「あのですね、ボク一応真面目に話してるんですけど」

「いちごカフェオレ飲むの止めない？しかもそれ6パック目。」

「日本は基本的人権を認めてるってことくらい知ってるよね？（にっこり）」

訳：一応真面目にきいてりゃ何したっていいだろーがよそんくら

い頭使え。

「なんか…すみません」

ホン。クコン。ヤクなしたって、俺はアキの言いたい事（つつか言葉の裏）がよくわかる。これも愛のなせる技？とこの前かなり真剣に訊いたら、

「小野篁に会わせてあげようか？」

と言われた。オノノタカムラって誰ですかと思ったけど、その時のアキのイナズマ効果万点の背後に暗雲垂れ込めさせた雰囲気にかけてとりあえず黙った。

家に帰ってゲームエロ本etc…に埋まってる広辞苑（かれこれ8年は使ってない）を引っ張り出して調べると、小野篁は平安時代の歌人で冥府（これも調べたらどうやらあの世のことらしい）のお役人という伝説があった人らしい。

つまり死んで来い。むしろ死なせてあげよっか？的なことを言われたわけだ、俺。

次の日大いばりで言ってやったら、

「トリ頭の上に馬鹿で阿呆なんだね、アンタ」

と馬鹿にしてスト（馬鹿にしてる、の最上級）な顔で哀れみの視線をくれた。

「なんか…すみません」

と言ったら、

「何で謝るのかわかんない。謝ることでアンタの頭の造りが改善されるんだったら話は別だけどそんなワケはないでしょ。阿呆は死んでも治らないって言うし」

あたかも何であやまってんのかわかんないヨ

日常つつーのは、衝動で満ち満ちてる。

条件反射つつーのは、俺達が抑えられなかった欲望のカタマリだ。人間つつーのは、誰も彼もがエゴイスト。

「逃げ出したいと思うのは、ワガママ何でしょーかねエ」

「ワガママでしょ」

6月のじつとりとした空の下、裏庭のベンチに並んで座る俺達。右にいるアキが、6パック目のいちごカフェオレを放る。

キレイな放物線を描いて、それはゴミ箱の中に入る。

ってかキミ。なんでバスケット部はいんないの？野球部でもいいよ？

何度か言ってみたけれど、その度に同じ答え。「俺帰宅部部长だから」。かく言う俺は同部会計。（微妙）只今部員募集中。

「なんでデスカ」

アキはうざったそうに左手で前髪をかき上げ、右手でいちごカフェオレのパックにストローをさしながら（7パック目！）言う。

「人にかかる迷惑考えてない」

「は？別に迷惑かける人なんて」

「いるよ。俺代表者」

そう言うってから含んだいちごカフェオレを飲み込むために、アキの喉が上下する。

「あんたがいなくなったら、日常がつまなくなってるんだけど」

ヤツは、

俺が青空トリップをしない理由で、帰宅部部长で、

それで、俺がいなくなったら困ってくれるヤツの代表者だ。

3 . 空とぶケモノ・A（後書き）

例え、

ぼーとしてばかりだったり、

ちょっと自暴自棄になってたり、

ちっとも勉強しなくても、

僕らは大人が思うより、

ずっとたくさん、難しいことを考えてるんだ。

4 . 空とぶケモノ・B

名前	：白石ユウヤ
身長	：180cm 強くらい
体重	：
瞳	：濃紺
髪	：茶
生年月日	：1987年 月 日
血液型	：型
在籍学校	：私立紋峯学園高等部2年C組在籍
成績	：下の上と中の中を行ったり来たり
性格	：

空欄部は不明

空とぶケモノ・B

人間と言うのは全てエゴイストだ。

獣よりケダモノくさいケモノだ。

例えば、人に優しい人でも「人に優しくしたい」という自らの欲求を満たすために、人に優しくしている。

それと同じで、生きているのも自覚がなくてもどこかで「生きたい」と思うからだし、

死ぬのは「死にたい」ないし「もう生きていたくない」と思うからだ。

人間は、自分の欲望に忠実に生きるケモノだ。

だけどときたま、「生きたい」とも「死にたい」とも思っていないヤツがいる。ものすごく珍しい。

まるで、自分は望んでいないのに体が勝手に生きているような、不安定で確かな矛盾した存在。

白石ユウヤはそんなヤツだった。

「人間と言うのは全てエゴイスト」というさっきの話も、ヤツの受け売りだったりする。

（“「生きたい」とも「死にたい」とも思っていないヤツ”の話はヤツが教えたんじゃないかって俺が考えたことだ。きっとヤツにそれを言っても「そんな人間いるわけないじゃん」と笑うだろうけど）

「こっから飛び降りたらどーになりますかね」

「死ぬ」

「…ま、そうだね。一発でアウトだよきっと」

ザン、ザザンと波が音をたててテトラポットにぶちあたり、白い雫をまきちらす。

何万年も何億年も、飽きることなくそればかりを繰り返す青い水のカタマリたち。不毛だとは思わないのか。——水に意思があるわけないから思わないか。

白い雫を見下ろす俺達は、海岸堤防のへりに並んで腰掛けている。

「それに海開きにはまだ早いんじゃない」

「そうですネ。クラゲがわんさかいるでしょー」

「サメ」

「いるんデスカ!？」

「さあね」

ヤツの自殺（ヤツ曰く「青空トリップ」）を止めたのは、5月の終わり。

大分気温と湿度が上がってきている6月の中ごろの今まで、特別変わったことはない。

なんとなく屋上とか裏庭のベンチで並んでベントーを食べて、くだらない話をする。

その時なんとなく約束したり、帰りに偶然会えば一緒に帰る。

トモダチでも、ましてやコイビトでもない。腐女子が夢見るホモという類（腐女子はこれをBLと呼ぶ^{ボーイズ・ラブ}）の関係は、今のところ俺達の間にはなかった。

「麻川氏」

「何」

「俺が今、こつから飛び降りて死んだらどうしますか」

「さあ、俺も死ぬんじゃない」

「そんなあつさり…」

「これは俺のエゴですから」

「汚いですネ」

「汚いよ。キレイな人間なんているわけ？生きてることすらエゴなのに」

「そう言ったのはアンタでしょ。」

「そうでしたねー」

その間も、やつは食い入るように海面を見つめていた。

もし今ヤツが一人だったら、間違いなく飛び降りているだろう。

「ねエ、白石ユウヤ」

「なんですか」

「死んだら許さないから」

俺はまだ、ヤツの事が知りたい。

人の興味をこれだけそそっておいて、ほっぽりだして死ぬのは無責任と言すべき大罪だ。

「生きたい」と「死にたい」の狭間にいる、ニキビと子孫を残すためのフェロモンを造る時期（人はこれを青春と呼ぶ）のヤツは、特に「死にたい」に傾きやすい。

だけど、死なせないさ。

俺の全部をかけて、意地でも「生きたい」にかたむかせる。

ヤツは、とても大きな（学校の七不思議とか源義経〃チンギス・ハン伝説なんかより）謎だ。

それを解くためなら、俺は一生だってヤツの近くにいたいと思う。

「了解」

ヤツは、

青空トリップ志願者で、帰宅部会計で、

そして、いなくなってもらったら俺が困るヤツランキングのトップを独走しているケモノだ。

4 . 空とぶケモノ・B (後書き)

きみが何より大事だとか、

きみを護るとか、

そんなことは今は言えないけれど、
でもきみがいない人生なんて、
とてもつまらないと思うんだよ。
(だってそんなこと思っていない)

5・青春クロス†

突然だが、
俺の（多分）トモダチ・麻川アキは、
よくモテる。

青春クロス†

まあそうだよ。なんてったってあのルックスだもんさ。
身長は170cm弱、ほっそりした顔は一級品でおまけにあのストイックな雰囲気。

頭もヨシ、運動もバッチリ。

モテナきやおかしいんデスよ。中身を知らない愚かな純情少女達から・・・！

「麻川アキくん！あのっ、私2年A組の東野カナといいます。ずっと好きでした、付き合ってくださいっ！」

これぞ青春。ビバ青春。フィーバー青春。（は？）

多分恐らくきつと俺を待っててくれた（んだよね？）アキが裏庭のベンチでおさげの純情そーな女の子に告白られてます。

なんのタイミングかその時ちよーど裏庭に面する2階の廊下を歩いてた俺は、そのまま窓から傍観モード。

いやあ、いいねえ青春。（あれ親父臭い？過年臭漂ってる？）

ふとアキがこっちを見上げてきたんで、俺はひらひら手を振った。目が「見るのかよ」と訊いてきたんで親指ぐつと立てて「もちろんだZeeチエケラ」って返事したら、馬鹿にしてスト（馬鹿にしてる、の最上級）な顔で哀れみに満ちた視線をくれた。こ…これも、ひとつの…ア…アイの…カタ、チ…？

俺の耳はアフリカの先住民並にいいから、窓があいてりや青春ト

キメキ ガールとアキの会話がよおおおつく聞こえた。

「ごめん、俺きみのことよく知らないし」

「これから知ってもらえれば！」

「でも俺今恋愛に興味ないんだよね。だから」

「じゃあメル友からはじめてください！」

麻川氏… きみオスカーとれるよ。なんだいその新宿歌舞伎町ホスト並のキラキラスマイル、こういうのを営業用っていうんでしょーか。でもここまで見事だとあたいホれちゃうZe！（いらん）

アキが考えるようにはあと溜息をつく。今きみ「うぜエ」を語外に含めたよね。

東野力ナちゃんもやめなよ、そいつ性格悪いよ？

アキが見上げてきたんで慌てて目をそらす。性格悪いなんて考えたのがばれたらあたいの貞操が！（埋 ま れ ）

「そんなところにいたのか、ユウ。降りてきなよ」

誰 の 声 だ 。

今の何！？ねえ今の石・彰ばり“胸きゅん ハートフルスウィーツのなかにも青春のレモンみたいな甘酸っぱさアリ・効果は青春きらきらシャインとフローラル系コロンで！（きゃっ）”ヴォイスは誰のデスカ！！？

慌てて見下ろすとアキがにこにこ（いつものにつこりではなく）手を振っていた。

「嫌よ！どうせあたいが降りたら襲うつもりなんでしょ！？このケダモノ！」

「遊んでないで早く降りてきなつて、な（につこり）」

「（ヒイ）」

俺の頭の中じゃしつかり翻訳。あれはこう言ってる「つべこべ言わずにさつさと降りて来いやゴルア」。貞操どころか殺される・・・！と思ったけどアキのにつこりのほうがよっぽど恐いんでとりあえず窓枠に足をかけて思いつきり飛んだ。

「きゃあッ！」

カナちゃんの悲鳴が聞こえたけど大丈夫オールオッケイ心配ナッスイン。上手くいけば、

バキボキベキッ

「植え込みに落ちるからネ」

啞然としてたアキが一言。

「それって上手くいくって言っんですか」
「ごもつともです。」

ちよつとつぶれたハムカツサンドとデザートホーム・ンバーと
う・い棒×5が入った袋をアキに預かってもらって、やっとこさ植
え込みを抜け出て葉をはらつてると、

「怪我しなかったか、ユウ」

とアキが言ってきた。（この時体中にトリハダが立ったのはいう
までもなく。このままだとサメハダになっちまうぜあたい。水泳選
手にでもなつて「チョーキモチー」って叫んでこよっか）

「あんまり驚かせるなよ。全く心配させあがつて」

誰ですかあなたわ。

訊きたかったけど飲み込んだ。アキの目が「余計なこと言ったら
しばくよ?（にっこり）」と無言の圧力をかけてきてる。はっちゃ
け恐い。

そんな無言のカツアゲ（アブナイのはあたいの貞操（もういい）
）を見ていたカナちゃんが、「麻川くん…もしかして…!」と息を
呑んだ。

もしかしてって何。

「ごめん」

なんとも自然にアキの腕が俺の腕に絡み付いてきた。恐怖で声が出
ない俺に更にトドメ。

「俺こいつと付き合ってるから、邪魔しないで?」

うつそダーン。

いつのまにそんなことになってたんですか。俺の貞操はもうきみに奪われちゃったんデスか? (ありえない)

呆然としてる間に泣きながら走り去る力ナちゃん。止める間もありやしない。

「麻川氏」

「何」

「どっちがカレシですか。俺ですか」

「(そっちかよ)むしろあんたはイケニエです」

「は、イケイケ? そりゃ俺は今をトキメク銀河系のアイドルだけだよ」

「(無視) あんたにはしばらく、うざったいのを追い払うネタになつてもらいますので」

「…いつまでデスか」

「無期限」

「ユウヤきゅんは高いですヨ」

「覚悟の上です」

「…利子つきますヨ」

「俺んち金持ちですから」

「嫌味ですか」

「そーです(にっこり)」

「(ヒイ)」

「とりあえず」

「とりあえず?」

「明日から、頑張ってくださいね?」

「?なんで」

「いや、色々とさ」

翌日、女の子からのイタイ視線男共からの「幟堂センパイとタメはる美形とだなんて女達が黙っちゃいねえだろ、大変だろうけどがんばれよ。俺応援してやつから」等々のわけのわからん励ましにアイヤッと昨日のアキの「がんばれ」の意味を理解した。

そーだったのねと報告すると、

「ごめん…あんたがトリ頭で馬鹿で阿呆だつてことをふまえて言わなきゃいけなかったね」と哀れんでスト（哀れんでる、の最上級）な視線をくれた。

こ…れ、も…ひとつ、の…ア・アイの…カタ…チ…？

なんにしても、俺この高校で2度と女の子との恋愛はできねえな。誰か俺の青春返してください。

5・青春クロス†（後書き）

僕は今日から

学園で“幟堂センパイ”とタメはる美形で

恐らく学園で両手の指に入る腹黒策士の

無期限有利子イケニエ

比類無きいちごカフェオレ好きの暗殺者・アキと白石財閥の令嬢・
ユウヤとの恋は！？アキが所属していた組織、“バーコード禿げに
はなりたくないぜチエケラ”との対立はどうなるのか！？待て次
週！（違っ）

6・春のツエルニー・上

実は、彼には兄妹がいる。

どっからわいてきたのコイツら、と訊きたくなるほど、めちやくちや似てねエ兄妹がいる。

春のツエルニー・上

一年生カラーの藤色（って言ったら聞こえはいいけど手練れのオミズおねエちゃんみたいなでろでピンク）のラインが入った白いオーバーシャツ。（しろすぎて青光りして見える。ユーレイかよ）同じ一年生カラーの紐リボン。（これって使い様によっちゃ凶器よね）

紺基本に白とかピンクのチェックが入ったプリーツスカート。（もちミニ。悩殺パンチラ（スパッツです））

イーストボーイのVネックにブレザー着て紺ハイソ着用。

髪はさらさらキューティクル 薬用リップ着用完了！

サクラサク（むしろチル）四月。今日からあたいは高校生です

「うおっしやああああああ！高校デ・ビュウだZe！」

「そのつもりなら鏡の前でガッツポーズと制服にいちいち突っ込みいれながら着るの止めたら」

おおう。背後から聞こえる不機嫌そうな声（多分洗面所をを独占してるから）と鏡に写る眠たげに壁に体をもたせかけてる（低血圧）そのお姿は…！

「ブエノス ディアス マイスウィートおにい！」

「…スペイン語」

「当たり前。頭のよさも相変わらず、さすが私のおにいね」

「いつ独占されたのか憶えがないんだけど」

「何言ってるの！私達はこれまでお互いを独占しあってきたじゃない！」

「あのね…」

嬉しいのはわかったから、いい加減にしないとけたくり倒すよ？

（につこり）

そんな過激なところもステキだＹｏ。（なんて言ったら本当にけたくり倒されかねないから言わない）

ダイニングに行くと、オッサンがテーブルで女物の洋服カタログ見ながらモンブランと味噌汁と焼き魚（鮭）を食べてた。思うにモンブランが主食であとおかず。

何考えてんだらうこの人。おにいがコイツと一緒にご飯食べたがらない理由がわかるよ。

「おはよーさんサキ。高校の制服も似合うで我が妹」

「黙れオッサン。私の兄は一人だけだ」

「オッサンって…まだ俺１７なんやけど」

「ふん、現時点で私よりも２つも年上でさらにこの月末で３つ年上！オッサンで十分よ」

今日のブレックファスト（ブルジョアジーに）はすあまとキムチと味噌汁かけご飯とバナナ。これが正しい食事なのよ！

「お前：よくそないなメニューで食うなあ・・・」

「自分が正しい味覚持っていないからってシけてんの？これが正しい朝食よ！（どーん）」

「（多分違うんやないやらか…）まあサキがええならええか」

あ、私がオッサンオッサンって言ってるから親父と勘違いしてる人いるかもしれないけど違うから。こんなヤツから生まれるくらいなら私自らの臍の緒で首締め上げて死ぬね。（少なくとも男から生まれることはないけど）

オッサンはおにいよりもひとつ上のレキって名前の…あ…に…。（相当イヤ）

去年高校ほったらかしてふらふらーとどこか行つて関西弁習得して帰ってきた意味不明かつ味音痴なダブリ学生。だからおにいよりいっこ上なのにおいと同じ学年でベンキョーしてる。

バカだよなー。わざわざダブんなくったって書類ちよちよっとちよるまかせばよかったのにサ。

って前言つたら、

「サキ、俺はまっとうに生きるって決めたんや……」

と妙にすがすがしい目で言われ、あまりのキモさに吐いた。

「つと、そうだとッサン。今紋高の実権握ってるヤツは誰なの？」

「（実権って……）生徒会長の熾堂リナやと思うで」

「熾堂リナね！とりあえずまずKCNは外せないわよね」

すあまをつつきながら「打倒熾堂で下克上」「作戦を練っていると、オッサンが顔ひくひくさせながらこっちを見つめてきた。なにオッサン、キモイよ？」

「……サキ、KCNって青酸カリやろ……？」

「あらオッサンのくせによく知ってるじゃない」

「それをどうするんや……？」

「決まってるわ！紋高の金正●に毒を盛るのよ！」

「いや、熾堂は別に独裁政治を強いとるんとちゃうんやけど」

「それでも必要でしょ、私が権力者になるためには！」

「ならんでええよ……」

私とオッサンの食事が終わったら、やっとおにいがダイニングに来了た。

「お、おはよーさん。数学のノートみして？」

「開口一番それ？ねえ兄貴、あんたに兄としてのプライドは？」

「ない」

「だよーね」

ぶつぶついつつおにいはおっさんにノートかしてあげる。だって優しいから！

さて、今日からのジョシコーコーサー生活、いいこともタナボタも権力もたくさんひきよせるわ私の強運で。

とりあえずオツサン、よだれふけ。(遅い)

決意を固めるサキを横目で見つつ、おにいと呼ばれる彼は思った。こいつら2人とも味覚おかしいんじゃないのか。

少なくとも10年以上食卓を共にしているが、今だこの空前絶後に奇妙なとりあわせの食事には慣れられない。(もちろん弁当とか夕食とかも例外ではなく。こいつらの友達苦労してるんだろっ)

そしてサキ、お前は地下に研究室つくって籠るのはもう止めてくれ。

そしてレキもとい兄貴、お前は女性の洋服カタログ見ながらニヤつくのは止めてくれ。

兄弟唯一の常識人である彼は認めたくないが、

長男 レキ(17) 高2(ダブリ)

次男 アキ(16) 高2

長女 サキ(15) 高1

こいつら3人、しっかり血がつながった麻川3兄弟です。

6・春のツェルニー・上（後書き）

別名

“作者ですらも驚いた新事実が発覚した話”。
超似てねえ。どうしたことが。

そしてコイツが準本編のヒロインです。

紋高のヒットラーを目指す少女。

…果たしてラブコメとして成立するのか。

7・ 春のツエルニー・中

よし決めた。

あいつシめる。

春のツエルニー・中

「窓は？オッサン」

「閉めたで」

「鍵は？おにい」

「閉めた」

「「弁当は？サキ」」

「失礼ねちゃんと持ちました」

「「「完了」」」

いざ、ときどきの高校生活へ！

「で、なんでオッサンいんの」

「つれないなー、どーせ一緒の方向やん？」

「近寄るな阿呆が移る。私はおにいと行くの！」

「そのおにいはもうエレベーターで降りとるで？」

「のをををををを！」

階段をマッハで駆け下りたら（むしる転げ落ちてた）おにいはまだエントランスから出たとこにいた。

なにぼんやりしてんのかと思ったたら（それでもカッコイイけど）眠そうに歩いてく変な男を見てた。多分同級生。

「あれ、アキ知り合い？」

「いや、こっちは知ってるけど向こうは多分俺のこと知らない」

「いやン、なんか意味深」

「埋めてあげようか（にっこり）」

「（ヒイ）冗談やて…」

男が通りすぎてからのろのろと歩き出したおにいについていく、
変な男はいなかった。横道に入ったのかな？

学校へ行く途中に藤宮力オルとゆー人にあつた。

サッカー部のヤツらしく、おにいにこないだの試合の助っ人のお
礼だけ言つてマツハでかけて行きあがつた。

この私をシカトするとは言い度胸じゃないの。

よし、今度シめとこう。

「サキ…なんか物騒なこと考えてるんとちゃう」

「オツサンには未来永劫関係ないわ」

「（ちよつと傷つき…）」

入学式の新入生代表あいさつはかなりキマった。

これで私は紋高のムツソリーニ！（目指すはヒットラー）

「なあ、アキ」

「（なんでうちのクラスの列にいんの）何」

「サキって首席入学やつたっけ」

「違うと思う」

「せやったらなしてサキが新入生代表あいさつやつとん？」

「想像道理なんじゃない」

さすが首席クンよねー、ちよちよつと家に電話したら新入生代表
譲ってくれたもの。

ちよーつと「お宅の庭に水素爆弾埋めたんだけど」って言うてみ
ただけなのにNe

さああとは金正●の登場を待つだけよ！

かかってきあがれ熾堂リナ、リナなんてへぼっちい名前の女には
負けないわ！（全国のリナさんスミマセン）

「——……続いて在校生代表あいさつ」

熾堂…リ…ナ…。

ヲ ト コ か よ ！ ！ ！

男だよ！

プラチナみたいな銀髪ロングヘアーだけど男だよ。あれは男だよ。うわはあこんな美形いるんだねおにいには劣るけど。いやあサキどんひとつ賢くなっただよ。

だからって容赦はしませんケドね。顔に傷つけなくなかったらさっさとひっこめ。

「幟堂リナ！」

その場で椅子の上に仁王立ち。どこからか風。効果さんサンクス！（いねえよ）オッサンが意識ぶっ飛ばしそうに目エ回して、おにいはいげんなりした顔でこっち見てる。

あたいは今から戦場に行きます。

「たった今からあんたは私の敵よ！私は紋高のヒットラーになるんだから！！！」

（それ無理、ってか止めて。と全校生徒は思った）

男のくせに幟堂リナ（全国のリナ（。）。さんごめんなさい）はふつと笑って、

「ありがとう、楽しみにしてるよ」

とかほざいた。

女子の黄色い声130ホーン（飛行機の騒音越えたよ）ぐらいが体育館を揺らした。ねえあんた達うるさい。（怒）

舞台を睨みつけると、幟堂は楽しそうに笑ってあがった。

よし決めた。

あいつ今日シめる。

あのニヤニヤした顔叩き潰す。

「…なあ、アキ」

「何」

「今絶対サキ幟堂シめよーと考えとるな」

「とめたら」

「サキと幟堂の衝突なんて生存率飛行機のクラッシュ事故と同じくらいやで？俺まだ死にとうない」

「幟堂には痛いところ握られてるし？」

「なんで知つとん！？」

「いえ、風の噂で」

「…さよけ」

決闘！金正・幟堂VSムツソリーニ麻川

時：本日放課後

場所：生徒会室

立会人：無し

怪我しとーないやつは近づかん方がええで、命の保証はあらへんさかいな

BY 麻川レキ

7・春のツエルニー・中（後書き）

えー…。

紋高最強の腹黒策士と、紋高最強の破天荒少女と、紋高最強の不幸少年の…

ら、ぶ…こ…め…？

8・春のツエルニー・下

そいつの瞳はまるで、

真夏のぶつとんだ青空と、どこまでも続く鮮烈な草原だ。

そいつの瞳はまるで、

冬が過ぎて雪が解けた下から、初めて出てきた草の芽だ。

春のツエルニー・下

「幟堂リナ、勝負よ！」

来た来た。

入学式でとつても目立ってた、毛逆立てた子犬みたいな女の子。

「いらつしゃい、麻川サキちゃん」

「ちゃんづけしないで気色悪い。私のことは麻川様と呼びなさい！」

おまけにすごくおもしろい。

「はいはい、麻川様。本日はどのような御用件で？」

「さつきも言つたでしょあんた実は馬鹿？決闘よ！」

（さつきは勝負つていった気もするけど）決闘。

女の子らしからぬ言葉がぽんぽん口から出てくるのは、ある意味ものすごく小気味いい。

一年生の頃に紋高に残つてた古臭い「男女交遊禁止」の校則撤廃を公約に生徒会選挙に出馬して異例の3年間連続生徒会長、おまけに264ある校則のうち183を撤廃・改定してきたからかよく知らないけれど、なんとなく恐れられてるらしい僕にこんな口を聞く子も珍しい。

それにすごく愉快だ。いいオモチャになるかも。

「何ニヤニヤしてんのよ気持悪い」

「いえいえ、麻川様ってかわいいなあと」

「当然よ！アキにいの妹だもの！」

「そついえば麻川様、2・Dの麻川レキの妹でもあるよね」

「あんなモン兄じゃないわ」

「（すつこい嫌われてる…）ところで麻川様は何部に入るの？」

「科学部よ」

「なんでまたそんな部費ばかりかさむ、薄暗い部屋の中で実験ばつかしてるような部活に」

「科学部のために紋高入ったのよじやなきゃこんな私欲と横柄でドス黒く染まつてる学校なんかに来ないわ！」

ああそつか、私立だから部費がすごいんだよね。

ふむ、以外に頭もよさそうだ。

ますますおもしろい。

「ねえ生徒副会長やってみな」

「イヤよ」

「速いね…」

「なんでこの私があんたのサポートしなきゃなんないの」

「そつか、残念だな。副会長とかその他幹部って会長の逆指名だからめつたな話じゃないし、生徒会の内部情報も知っておかないとポスト職堂には勝てないかもしれないけど、必要な」

「誰そのポスト職堂って」

頭はいいけど単純だね。うん、うまくひっかった、食いつきは上々。

「あれ、きみともあろう人が知らないの？2・Bの江崎シンイチくんだよ」

「そいつ、強い」

「さあ…当選確実とは言われて」

「ツブす。私そいつツブすわ。だからついでに副もやってあげる。ありがたく崇め奉りなさい！」

エビでタイを釣る。

「ごめんね、シンイチくん。これからがんばって。（にっこり）」

「是非宜しくね、麻川さん」

「あんたとはよろしくないわよ」

うん、でもね、

シンイチくんを潰す計画たてるのに一生懸命で、僕が呼び方変えたの気付いてないでしょ。

こんなおもしろいモノ、逃がさないから。

覚悟しててね？麻川サキちゃん。

本日のサキの日記

生徒副会長になった。

とりあえず江崎とかいうヤツは足蹴つといた。でも折ってはない。だつてあいつ紋高の中田らしいし。

私ってば優しい。

オッサンは今日もキモかった。

おにいはい今日もさわやかでかつこよかった。

幟堂は変なヤツだけど、とりあえず下克上狙ってみる。

幟堂の瞳、右と左で色が違った。

右が青で左が緑。

まったくナリからナカまで変なヤツ。

そーいえば江崎も髪の毛黒いくせに目が緑色だった。

明日から忙しそーだ。

もう寝る。明日も頑張れ、私。

「一番気の毒なのは江崎ってヤツやな」

「兄貴、盗み聞きした上にサキの日記こっそり読んだ？」

「いんや、堂々と立ち聞きして堂々と見たんやで？」

「（へ理屈）」

「なんにしても、明日っから大変そうやなあ」

「それは言わないべきだと思う（溜息）」

8・春のツェルニー・下（後書き）

お気づきの方、いらっしやったりするとは思いますが、タイトルの元ネタは“冬のソナタ”です…。

まあ、同じピアノ教本でも“ソナタ”と“ツェルニー”はタイプが違うんですけれどね。

“春のソナチネ”とか“春のバイエル”よりも“春のツェルニー”のほうが合っている気がするという、Kの独断と偏見です。

あわれな江崎くんはどうなるのやら。

9 . 破天荒遊戲

それってさ、
理不尽ってもんじゃない？

破天荒遊戲

どぐわおんッ

「江崎シンイチ、今日はグラウンド200周勝負よ！」

謹んで遠慮申し上げます。

昨日は3時間耐久鬼ごっこ、一昨日は両手DE腕相撲、その前はもう忘れた。

勝ちやあ怒るし（そりやもう烈火の如く）負けりやあ怒る。（わざとね！とかって）一体どうしろと。

「シンイチ…いつもの子」

「聞こえてる、あれだけ声でかいんだしよ」

「うん…、でもね、ほらシンイチが行かなきゃテコでも動かないよ、あの子」

むしろテコ持って来い。

おろおろしてるカヅキには申し訳ないけど、俺もうやだから。
誰か俺はポスト熾堂なんかじゃねえって言って下さい。

麻川サキとは、初対面からすっげえインパクトだった。ディープ・インパクトだった。地球が滅ぶくらい。

がしゃばきッ

「江崎シンイチってどいつ!？」

「（ドア壊れ…ッ）お、俺だけど」

『あんだねポスト幟堂！成敗！！！』

『は？俺別にポスト幟堂とかじゃ
ドカツ』

『ふん、言い逃れようったって無駄よ。お天道様が見てなくてもこの私の目が見てるんだから！』

『（こ、こいつ右足蹴りあがった）な、なんなんだてめエ
『麻川サキ！未来のヒットラーよ！』』

ヒットラーかよ、じゃあ俺フランシスコ・ザビエルで。

っじゃなくて！（一人のりツツコミ）

入学式の日に新入生代表あいさつやってたヤツだって後から知った。俺は立ったまま寝てたからそのあたりはよく知らねエんだ。

誰が言ったか知らないけど（いやあいつしかいねエけど）俺はポスト幟堂じゃない。

「お邪魔するわよ鶴尹カツキ」

「あ、はいどうぞ」

てめエは人のクラスにずかずか入ってくんな。そしてカツキ、お前はいそ椅子用意してんじゃねエ。

回想にふけってる間に勝手にクラスにはいつてきた麻川は、あたりを見まわしてふんと鼻を鳴らした。

「シけたクラスね！」

「なんだと！？」

反応を示したのは俺じゃなくてその他多数の男子。

「てめー１年のくせに、女だからって容赦はしないぜ！」

「シけてるのをシけてるっていつて何が悪いのよ。江崎がいるからこのクラスみずとりぞうさん何個あっても足りないくらいシけてんじゃない！」

そっちかイ。

男共の目が一齐にこっちを向いた。

「コイツさえいなければこのクラスは見違えるようになるわ！」

だからコイツ私に貸しなさいちょっとあーするから」

あーするってどーするんだ。

ツッコミをする間もなく両脇をガッチリ掴まれて麻川の方に突き出された。

ヲイ、とそいつ等の目を見ると、「すまん、売る」と書いてあった。

ふうん、いい度胸だね。

ねエ、後で久々に体育館裏行こうか。大和魂シめなおしてあげるよ。

ああカヅキ、そんな心配そうにしないで大丈夫（多分）（きっと）だから。

今日はギリギリタッチの差で負けてみるよ。

だからその間に俺をポスト幟堂って言った犯人見つけ出しといってもらえる？

あいつしかいないんだけどね。

教室を出るとき奇妙に凹んだドアを見た。

さっきの変な音、ドア空けるときの音だったのか。

ってかキミの体どーなってるの？鉄人2●号ですか？

「麻川、お前握力何？」

「あんたに教える義務もなけりや義理もないわ！」

あーそうですか。（怒）

校庭に引かれた白いスタートラインが見えてくる。

これから200周か… かったりいな…。

試合語談

「やっぱりあんたわざと負けたわね!？」

「なんでそーなんだよ、ギリギリタッチの差で俺の負けだろ!」

「問答無用。私がわざとつつつたらわざとなのよ!」

「（…無茶苦茶…）」

「明日はバトルロワイヤルドツチだから！」

…エンドレス。

9 . 破天荒遊戯（後書き）

彼女の体力は底知れませんが、
彼は仮にも紋高の中田なので、
持久力は底知れないのです。

10 . あの一のフルネーム。上

だつて、
知らなかったんだヨ。

あの一のフルネーム。上

朝だね。

残念ながらカッコウは鳴いてないけどさ。あれって湖畔の森の影の特許特売品でシヨ。

こつちじゃ鳴くのはせいぜいスズメと大地。

爽やかな朝の光を浴びて地面がゆれるゆれるゆれ…つてええ！？地震だようしようスマトラ沖じゃないのにあたい夢も希望もみちみちの17歳で死にたくない！（埋もれてください）

なんか被るもの、被るもの…。今日抱持ってきてねエ！（がーん）び、ビニール袋かなんか落ちてないかな。

「ビニール袋被ってなんか意味あんの。むしろ窒息するんじゃない」呼んでないけど飛び出る麻川氏。

「オッハヨーございます。しかしもうサヨナラですねこの揺れじゃ生き延びられません」

「（チツ）」

「（今舌打した・・・）ところで麻川氏、息が乱れてますけど走って来っおあ！？」

ぐわっしと胸を鷲掴みされてかなり手荒に引き寄せられる。貞操の危機より命の危機を感じた。いやん朝からとか言ったらんねエよ

コロサレル！！！！

「悪いけど黙ってて。地球が減んでも口開かないでくれる？（にっこり）」

ら、らじゃあ。(恐ッ)

「あと、俺の腰に腕回して」

「(ハア!?)」

「いいから(さっさとしろよ)」

「(…ハイ)」

アキ、腰細っ。とりあえずホモ疑惑よりも麻川氏の笑顔の方が怖いので腕まわしたら、アキの腕が俺の首に回された。締められる…!?

「殺して欲しいなら今すぐ締めるけど(につこり)」

「(しやれになってねえ…)」

どどどどど、という地鳴りの音がどんどん大きくなって、突然悲鳴が聞こえた。「きゃーっ」て女の子の。

「麻川くんと白石が抱き合ってる!」

抱き合ってない。

どっちかつつーと首締められてる。

と、言いたいところだけどヘタするとホントに締められかねんで口チャック。麻川氏は追い討ち。

「何だよユウヤ・・・朝っぱらから」

何もしてないよ。

むしろ首締められてるんだって俺わ。え、なんか力はいつてきてない麻川氏。

突然黙った女の子達の耳はさながらダンボで目はオードブル用の巨大皿。…もしかしなくてもさっきの地響きは君達が麻川氏を追っかける音ですか?(震度は3)

「え、本当?うれしい…。大丈夫、今日の放課後は夜まで空けてあるから」

何のために。

いいよ空けなくて。むしろ用事入れといて。

キヤーッってもう悲鳴。つつか騒音?15オバンくらいあるヨ。

(「オバン」は、40〜60才の、口やかましいおばはん一人のう

るさを単位としたもので、自動車の騒音については、5オバン。
飛行機の轟音は10オバン。らしい)

アキ、女の子達にトドメ。

「ごめん。邪魔しないでもらえるかな(憂いを帯びた流し目)」
俺にもトドメ。

絶望の悲鳴(もーさながらムンクの「叫び」)をあげて、女の子
達は散り散りになってった。

とんでもない上に解けない(だって麻川氏こわい)誤解をしたま
ま。

1時間目、自習。

俺含め男3人は顔をつき合わせた。

「…ってことがあったんだけど」

セン、興味なさげに本取り出すな。

「あー、どーりで朝から女子達がキャピリしてるわけね」

「カオル…キャピリって何」

「キャピキャピ×ピリピリ」キャピリ」

「この阿呆の頭の中ではそれで連立方程式が成り立っているらしい」
センが本から顔を上げてさりと云った。無表情で。笑えねエ。

「いつにもまして気合入ってるきがしますケド、なんでなんデスか
ね」

「さあ、発情期なんじゃねーの?」

カオルにツツこむより先に、センがはあと溜息をついた。

「ユウヤ…今日は何の日だ?」

「は?清掃用具点検の日」

更に溜息。幸せが逃げる逃げる。カオルが「何委員だよ!」って
ゲラゲラわらった。

センはもっかい本に目を落としながら言う。

「ボケもたいがいにするべきなんじゃないのか、今日は麻川アキの

誕生日だ」

「へーそうなんだ。ってうええ!？」

新事実発覚。

驚くよりも「プレゼントの金ねえな」とみみっちいこと考えた、
6月23日の空の下。

10・あの一とのフルネーム。上（後書き）

麻川氏のバースデイの話。

突然友達（多分）の誕生日が判明したら慌てるよねって言う。

11・ あの一のフルネーム。中 A

うん、だからさ、

男のしかも麻川氏相手に何プレゼントしたらいいわけよ。
いつとくけど、俺金持っていないからね？

只今財布にある全財産210円。

あの一のフルネーム。中 A

作戦1

「そういうわけで、いざ」

麻川氏の靴箱あさりに行きたいと思います。

べつにストーカーじゃないから。

女の子達はどんなものアキにプレゼントしてんのか調べるの。

「わかったからさっさと行ってこいよ」

「うん、そうだねカオルくん。でもこれってなんか変態っぽくない？」

「気のせい。ヘンタイじゃないって」

でもセンが明かに変なものを見る目でこっちを見てるんですが。
き、気にしない気にしない。

靴箱の扉に手をかけて、いざ。

ぱこっ

ドサバサガサパキザラザラカーンカサカサガンドンバシベキボキ
バキグシャガシャ

「」

「」

「」

予想しとけよこの事態。

開けたらプレゼントの雪崩。ありえないしかもなんか壊れた？

「どうするんだ、これ」

「いや、どーしょーも。とりあえずもどしとく？」

「ほっとけ。それよりプレゼント考えろ、とりあえず女どもが贈ったプレゼントからテキストに見繕っちゃおう作戦は失敗だな」

カオルくん、あんたあオ二ですか？

作戦2

「カンパしてもらってプレゼント買いに行く」

カオルくん、それはナイスアイディアだよ！

「で、誰にカンパしてもらって何を買うわけ？カオルはカンパしてくれんの？」

「おーいセン。ちよつと金貸せ」

あんたあ貸さないんですね。

「断る」

「あ、そ」

断られてんじゃねエよしかもあっさりだよ。

「失敗だな！」

「そんな爽やかに言わないでください…」

作戦3

「いつそ“俺をプレゼント”はダメか？」

「うわそれナイスアイディアだよ殺意を覚えるくらい」

「ちよつと…言ってみただけ…です…」

作戦4

「あ、これは？」

目の前に並べられたあらゆる店の割引券。広告についてるヤツ。これって元手タダじゃん。

しかも、

「…ほとんど有効期限切れてますが」
「ダメかあ」

だめだよ。ただのゴミじゃねーかそれじゃ。

作戦5

「カンパ」

「それさつきもやったから」

「…」

「つまりネタ尽きたわけですね？」

ほんつと、どうしろと？

「何でもいいんじゃないのか」

「そーは言いましてねセンくん、ジャンルが広すぎて思いつかないですよ」

「花束とか」

「花束とかそんな金ないし、っていうかどっかの少女マンガみたいな…」

「金のかからない花束なんぞいくらでもつくれるだろう」

「はー？その辺の花摘むんですかー…って」

それだ。

11・ あの一とのフルネーム。中 A（後書き）

どうやら「コード」は、人物が鼠算に増えていく特性があるようです。

人気キャラランキングとかやってみようかな。（笑）

多キャラ小説は大変です。いや、自分で多キャラ小説にしたんですけどね。

12・ あの一とのフルネーム。中 B

何やってるのかわかってるのあんた達。

あの一とのフルネーム。中 B

靴箱に軟禁錠かけとくべきだった。

靴が出せない。

とりあえず手前の方から崩して、上履きを発掘する。

うん、あのさ、

靴箱にケーキを入れる精神、疑ってもいい？

恐らく朝一番に来て俺の上履きの上に置いておいたのだろうケーキは、詰め込まれたプレゼントによって潰されて上履きが生クリームまみれになっていた。

イジメだろうかとちよつと疑ってみる。

しょうがないので保健室のスリッパを借りた。

ぺたぺたという又けた音がするスリッパは、走りにくい。

いつそ裸足になろうか。

「麻川くーんっ、待ってエ！このプレゼントを受け取って……！
！！」

いらないから。

朝ヤツを使って蹴散らした人たちは復活したらしく、教室に行くまでにかんりの大群になった。

さすがに教室に入るのはためらわれるらしく、ドアの周りに集結している。

すこぶる通行の邪魔だ。

「……」

引き出しに軟禁錠かけとくべきだった。

うんあのね、きみたちからのプレゼント程度のものなら自力で買えるから。（にっこり）

「携帯まであるし……」

誕生日を祝ってもらえるのは幸せなことかもしれないけれど、頼むからかさばるものをどかどかよこさないで欲しい。

「おめでとう」だけで十分だ。

1時間目終了後に見に行った靴箱（ほつとくとすぐ溜まって靴箱が壊れかねない。来年は軟禁錠買つところ）は、誰かによって開けられていてプレゼントが雪崩れたまま放置されていた。

イヤガラセかとちよつと疑ってみた。

仕方なく拾って教室に持って帰ったけれど、その間中痛いほどの視線を感じた。多分プレゼント渡すタイミング狙ってる人たち。

ドアの前にたかっている人たちを押しつけて、プレゼントをロッカー（これは元から鍵つき）に詰め込もうと開けたら、あるはずのない（だって鍵ついてる）プレゼントが雪崩てきた。

「……」

ねえあんたたち、これって犯罪じゃないの？

多分誰かが合鍵作りあがったんだろう。

今度、蘭緒（麻川家のおつき。年齢不詳の男）にロッカーの鍵付け替えさせよう。指紋で照合するヤツに。

多分、ヤツは今日が俺の誕生日だと言うことを知らない。

まあ教えてないし、俺もヤツの誕生日を知らない。

別にプレゼントが欲しいわけじゃないけど。

「アキー、相変わらずモテモテだNe」

レイがにやにやしながら肩に腕を回してきた。廊下の人たちから盛大なブーイング。どうでもいいけどブーイングって豚の鳴き声＋現在進行形らしいよ、知ってた？（廊下の人たちへ必殺流し目）

まあレイだつてまがりなりにも女だ。俺は女とは思ってないけど生物学上一応は女だ。

ヤキモチの対象にも一応なれるんだろう。

「で、白石の姿が見えないけど肝心の彼はどこに？」

「自分のクラスじゃない」

「え、プレゼントもらってないの？」

「もらってない」

「あ、帰りにもらうんだ！いーねエらぶらぶV」

「一緒に帰る約束なんてしてないから」

「えっと、どういう事？」

「誕生日教えてないって事」

「はーあ！？」

だめじゃん！とかつて喚き散らすレイをほつといて、俺は窓から空を見た。

今日は、17年前に俺が生まれた日だ。

ヤツに教えたなら、祝ってくれたのだろうか。

結局ヤツは放課後まで来なくて、今日1日で溜まり溜まったプレゼントはダンボール8箱分になった。持ち運び考えてるのあんたたち。

しょーがないので本家に電話をして蘭緒に車を出してもらつ。ついでに鍵の付け替えも頼んだ。

なんとなくまだヤツがこないかと思っていると馬鹿らしくなつて、家に帰ろうと思つて玄関で靴をはいた。

玄関から出た瞬間に、ばさつと何かが大量に降ってきた。

「花……？」

しかもそこらへんに咲いてるよーな花。つまり雑草。

玄関の底を見上げるとヤツがそこに仁王立ちしていて、「いたずら完了」とでもいいたげに泥だらけの顔で笑って言った。

「ハッピーバースデー、麻川アキ氏！フラワーシャワーのプレゼントだZe」

1人が考えていることは、世界で約100人が考えていることだという。

けど、

こんだけ集めといて花束にしないあたりとか、

実は花がついてないただの草も混じってるあたりとか、

多くても5人ぐらいしか考えないだろう。

まあ、とどのつまり、

非常にヤツらしいと思った。

12・あの一とのフルネーム。中 B（後書き）

やたらめったら一部の方に期待されているので、人気ランキングを掲載してみたり。

人気キャラランキング

一位 御帥セン

二位 麻川サキ

三位 熾堂リナ

人気ストーリーランキング

一位 春のツエルニー・上

二位 春のツエルニー・下

三位 I t h i n k・アイ ウォント・あ ばーど

本編の主人公たち、ことごとく返り討ちに合っています。どーだよその辺。

ぶっちゃけKは鷗尹カヅキくんが大好きです。（ヲイ）

（ちなみにこれは、ファンレター（作者へなどから）を奇跡的にいただけたときに「。。。が好き！」と書いてあれば、それを一票として数えております。ストーリーも同じく）

13・ あの一のフルネーム。下

「いやあ、ロマンチックなプレゼントですよネエ」

「金なかっただけじゃん」

「（ドキッ）いえいえ「モノより思い出」でしょ。それに麻川氏物あげたら迷惑がりそう」

「まあね、もういらない」

「その点俺のプレゼンツ　ならほっときや自然に帰るからエコマー
ク！」

「金かからないしね」

「（ドキッ）いえいえでも麻川氏嬉しそーでしたし？」

「嬉しかったですから嬉しそーなのは当然じゃない？」

「そーですか」

あの一のフルネーム。下

『フラワーシャワーですよ。そうですね？』

『草臭い』

おう… まあそりゃ。

『しょーがないでしょ草だし。それに俺一日中かかって集めたんデ
スよこれら！』

『どろだらけじゃん』

『犬のよーに這いずりまわりましたもので』

『……』

『あの、麻川氏？』

無言で俯くアキ。え、何もしかして怒ってますか？

『麻川氏い？』

『…ぶっ』

ぶ？

『くくつ、は、はははは！ちよつ、もーなんか駄目！はははははは！』

爆笑する麻川アキ。

ムービー写メしといてファンに売りつけりゃよかった、とあとから思った。（悪）

そのまま2分くらい笑いつづけたアキは、目元に溜まった涙をふきながら（そんなにおもしろかったのか！？）言った。

『なんかもう非常にあんならしいね』

『それ褒めてる？』

『さあ』

偶然肩に乗ったらしい四つ葉のクローバーを摘み上げて、アキは笑った。

いつものにつこりじゃなく、女の子たちに振り撒くにこにこでもなく、

『熱でもあるんじゃない、白石ユウヤ』

『は？何ですか麻川氏』

『顔、真っ赤』

すっげえかわいい笑顔だった。

ま、本人に言ったら殺されそうだけどネ。

「麻川氏」

「何」

「なんかへヴオくてすみませんネ」

「いえいえ」

それだけ持ってきたらしい四つ葉のクローバーをくるくる回しながら、アキは言った。

「非常にあんならしくて珍しいプレゼントでしたから、大分印象に残りました」

そーですかそれわよかった。（よかったのか）

「多分、今までで一番嬉しいプレゼントだと思います」

うん、まあね、

こんなことしかできないけどさ、

それでも精一杯、きみが生まれてきてよかったって思ってる。

そのちよつと後

「でもさすがにヘヴオすぎだと自分でも思っのでもいっ「プレゼン
ト」

「は？あんだ金あんの」

「全財布財産210円です」

「100均グッズ2つとか」

「違います」

「210円商品？」

「いえいえ、来月まで210円でのりきらにやなんので」

「（結局どつちもタダじゃん）」

「今月はひもじいですよ。ひもの爺さんじゃないです」

「（無視）で、何？」

「（うわシカト）トリビアですヨ」

「（無駄知識？）」

「ハリポ読んでます？」

「一応」

「リーマス・J・ルーピン先生っていますよね」

「（ちよつと考え）いたね、そーいえば」

「彼のフルネームは「リーマス・ジョン・ルーピン」です」

「……へえ」

「うわーへえ！反応うっす！」

「だって…ホント無駄…」

13・あの一とのフルネーム。下（後書き）

しばらく本編・準本編ともどもネタ充電期間に突入します。

捜さないで下さい。

は、冗談ですけども、しばらく番外編攻めになるかと思われます。
御了承ください。

14・TEARS

泣かないで。

泣かないで。

何がそんなに悲しいの。

物もお金も、ここにはたくさんあるのに。

泣かないで。

愛して欲しいなら、

愛が欲しいなら、

僕が愛してあげるから。

TEARS

私の父親には、本妻の他に本妻公認の妾がいた。

その中の一人に、まだ成人すらしていない一人の少女がいた。

私が12だったころ、そのひとは17だった。

そのひとは、いつも泣いていた。

元華族である「御帥^{みかみ}」の名を欲するが故の、時代錯誤な政略結婚で嫁いで来た彼女は、その幼さのために父から愛されず、また足の遠のかれた他の妾達の鬱憤晴らしにされて、いつもいつも泣いていた。

「何故泣くの」

私がそう尋ねるたびに、彼女は穏やかに笑って言った。

「泣いてないわ。母と約束してきたんですもの。どんなに辛い時でも決して顔を俯けずに、前を見据えて浅瀬を捜すって」

それは、彼女と彼女の母だけに通じる物語だったのだろう。

幼い私は歳の近い彼女を姉のように慕っていた。

護りたいと思うようになるまで、そう時間はかからなかった。

「セン、あなたの名前は“ひらめく”と書くのでしょうか？閃光のセン。素敵な名前ね、閃」

あまやかな彼女の声も、それを紡ぐまだ幼い唇も、細い四肢を持つ雪のように白い体も、強い光と脆さを同居させた大きな瞳も、

セン、と言う名前も、彼女が好きだというから好きだった。

だから、父を憎んだ。

きつと父に愛されることが、彼女の幸せなのだろう。それなのに彼女を幸せにしない父を憎んだ。

同時に、幸せに出来ない自分を憎んだ。

朝、昼、夜。

日は廻る。

春、夏、秋、冬。

月日は廻る。

私の体つきは、だんだんと父に近づいていく。

その隣で、彼女もまた、美しく開花していった。

私が15の時の、夏の嵐の夜だった。

寝苦しく水でも飲もうと部屋を出た私の耳に、ふと女の嬌声が風に乗って聞こえてきた。

その声は、聞き覚えのある声——恐らく彼女のお付きの女のもだった。

なんの拍子か、風の弱まった瞬間に女が叫んだ。

ご主人さま、と。

この屋敷で彼女のお付きがご主人さまを呼ぶのは、彼女が父親だ。それを裏付けるように、女の声をたしなめる低く聞きなれた声を聞いた。

そして、走り出す。

彼女は、恐らく今の声を聞いてしまった。

ノックもせずに部屋に飛びこむと、彼女は真っ暗な部屋の中で、床にうち伏していた。

泣いている、と思った。

いつものように、涙を流さずに声を殺して、穏やかな笑みの裏で私がそつと細い肩に手をかけると、彼女ははっとしたように顔を上げた。

背の中ほどまである、黒く長い髪が顔を覆うようにしていたが、その隙間から潤んだ瞳と濡れた頬が、見えた。

「閃……！」

とっさに見てはいけないものを見てしまった気がして目をそらした私に、彼女は抱きついた。

女性特有の甘い香りがして、頭がぐらりと揺れた。

私を抱きしめる彼女の腕の強さから、彼女が人肌を求めていることを知った。

耐えがたい衝動は、私の中に渦巻いていた。しかも彼女はそれを求めている。

それを認識してもなお踏み込めない私を見透かしたように、彼女は耳元で囁いた。

「閃、お願い。独りに、しないで」

その夜のことは、よく憶えていない。

ただ、彼女の柔らかさと温かさと、甘い香りと絡み付く声を、鮮明なまでに思い出すことは出来た。

熱に浮かされたような恍惚のなかで、彼女は言った。

「幸せ」と。

「人生つていうのはね、川の流れみたいなものの」

私の腕の中で、彼女は歌うように語った。

「流れの速さは人それぞれよ。とても速い人もいれば、穏やかな人もいるわ。」

特に速い人は大変よ。たくさんたくさん流されて、取り返しのつかないことになってしまいう人もいるの。けれどね、どんなに流れが速くても諦めては駄目。必ずどこかに、足について一休みできる浅瀬があるのよ。そこを目指して泳ぐの。

けれどね、下を向いていたら浅瀬があっても気付かないでしょう？だからいつも顔を上げて、背筋を伸ばすの。そうすれば絶対に浅瀬は見つかるから」

全部母が言ったことなんだけれどね、と彼女は笑った。

「だから俯いたり、泣いたりしないって決めていたのに、今日は駄目だったわ」

「…今夜だけじゃない」

「？何故」

「あなたはいつも泣いていた。穏やかに笑っているその裏側で、声を殺して涙も流さずに」

「…気付いて、いたの？」

頷くと、彼女は美しい顔を歪めた。泣いているような笑っているような、そんな曖昧な顔だった。

「気付いていた。ずっと前から」

「私が、好き？」

「ああ」

「そう。私もあなたが好きよ。とても好き。…愛してる」

愛してる、と言ったその響きは柔らかく甘く、私の脳を支配した。

彼女はその夜、本当に心からの笑みを見せた。

そうして次の日の朝、彼女は逝ってしまった。

自分と同じ名前の木の下で、嵐が散らしたその木の花びらの褥に抱かれ、その外装に似合わぬほど強烈な毒薬が入っていたらしい小さな薄桃色のガラスの小瓶を抱いて、穏やかに笑って。

「ツバキ」

今までにないほど白い頬に、涼しい夏のせいか狂い咲いた椿の、昨日の嵐で落ちなかった唯一の花が影を落としていた。

「ツバキ」

眠るように伏せられた瞼は、今にも開きそう。

「ツバキ」

触れた体は、服を通してまだ微かな温もりを感じるのに、甘い香りは残っているのに。

「ツバキ、ツバキ——…椿姫」

ここにあるのは、ただの体。朽ちていくだけの物体。

『私の名前はね、ほら、あそこの椿の木の“つばき”に姫と書いて“ツバキ”なの。私には勿体無いくらい美しい名前でしょう？』

「椿姫」

とても、あなたに似合う名前だと思ったんだ。

「椿姫」

ふわりと儚く笑うあなたを、

「椿姫」

護りたかった。

『駄目よ、言っでは駄目。それは私なんかに言つべき言葉ではないわ。あなたには、もっと相応しい人がいるのよ』

返そうとした唇を塞いだ、細い指。

あの夜のあなたは、私の至るところに残っているのに。

「椿姫……！」

あなたは、逝ってしまった。

私に残ったのは、あなたとの誰にも言えない記憶と、
言い損ねた言葉。

たった、それだけ。

何故泣いたの。

何故抱きしめたの。

こうやって、おいて逝ってしまうのなら、

なぜ、愛してるなんていったの。

教えてよ、

ねえ、つばき。

14・TEARS（後書き）

答えは、

まだ、

みつからない。

15・そんな2人の人間関係

「よう、失恋星の王子様」

「なんだよそれ俺は星の王子様かってーの。大体象飲み込んだツクダ二とかありえねーし」

「あれ、あれってウワバミじゃなかったっけ？少なくともツクダ二じゃあないヨ」

「うるさいなあ」

「ほお？（コーヒーを取り出す）いらないんだね、そうだよねキミは強いオトコノコだもんね失恋の1つや2つや5つ8つで凹まないよね心配した私がバカだった」

「スミマセン下さい」

「240円ね」

「は？」

「あんたのと私の。あんたのオゴリ」

「鬼！」

「なんとでもー。失恋星のおじい様はカネモチでしょうに」

「今おじい様つつたよね、鬼」

「耳鼻科行け（につこり）」

「スミマセンボクノカンチガイデシタ（棒読み）」

「そうだろうとも」

「…なあ」

「何」

「なんで俺フられんの？」

「そりゃあんたサッカーバカのくせに江崎にはいつも勝てなくて服のセンスも悪いしオンチだしアホでバカだし映画行きや爆睡するし無駄にメンクイだしアホでバカだし鈍いしケチだしドジで間抜けでアホでバカだし」

「ストップ！アホでバカって今3回言った。ってか刺さる、だいたい」

痛いから！」

「そりや事実を刺さるよーに言ってるんだもんさ。あとはまあ、むこうに見る目がなかったんでしょ」

「そう思ってもいいんでスカ」

「いきがるなよ童貞。オクテ過ぎてつまんねエんだよ」

「痛……ッ！今のは刺さった、刺さった！」

「そりや刺さるように言ってるもんさ」

「（涙出てきたZe……）」

「あー泣くな泣くな。いややっぱ泣け」

「どっちだよ。じゃなくて俺泣かないから」

「ばーか。溜めるより垂れ流せ。排泄物とおんなじだよ、便秘になりたくないや今のうちにすっきりしとき」

「お前、本当に女？」

「生物学上一応は。心は男になりたい」

「願望かよ」

「夢を捕まえたやつより追ってるやつの方が時に力を発揮するものなの」

「そーでスカ」

「そーですよ」

「……なあ」

「何」

「なんで俺が失恋するたび慰めてくれるわけ？」

「なぐさめてる？」

「いやあんまり」

「だよね」

「でも結果的にはすっきりしてる」

「ならよかったじゃん」

「まあいいんだけどさ。なんで？」

「あんたがフられると気持ちいいからです」

「うわひっど！ちよっと自分がモテるからってお前」

「違うよばか」

「違うって」

「あんたがフられるのが嬉しいのは別に「やーいいいい気味童貞お前にやレベル高すぎなんだよ」って思うからだけじゃないのサ」

「だけじゃないってことはちょっとは「いい気味」って思ってるのかよ」

「ま・ね。だって私モテるし？」

「うわ自分で。じゃあ何でなんだよ」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…好きですよ。私はあんたが好きなんです」

「…知ってましたっか気付いてました。ゴメンナサイ」

「はン、あんたが気付いてるって事ぐらいしってましたよ」

「（エスパー…！？）」

「ま、意気揚揚とラブレター持って教室出ていくのを見るのはさすがに辛かったですけれども」

「す、スミマセン」

「いえいえ」

「…あのさ」

「何」

「結局俺たちってどーいう関係なわけ」

「幼馴染以上恋人未満」

「微妙…。お前それでいいわけ？」

「そりゃ不満は色々あるけど今の関係って割と好きです」

「ふーん、そうなんだ」

「そうなんですヨ」

「…」

「…」

「…帰りましょ」
「そうですね」
「何かオゴります」
「それってデートのお誘いですか」
「どうでしょう」
「…好きですよ」
「知ってます」

そんな2人の人間関係

15・そんな2人の人間関係（後書き）

ずるい男と健気な女。

わかっているけど

でも、すきで。

16・ブラウン管の残像 チャンネル1

「こっちに逃げたぞ！」

「ちっ、また面倒な」

「さつさと捕まえねーともっと面倒だぜ」

「あんなガキとつとくたばっちまえばいいのによ」

「逃げた跡があるぞ」

「こっちだ」

「挟み撃ちしろ！」

ちっ舌を打つ。

逃げ切れない。

それでも、逃げなくちゃいけない。

今すぐに、ここから。

ブラウン管の残像 チャンネル1

「さあ今日で4週連続第1位！ユインの新曲にリクエストがガンガン来てるから行っちゃおう！メッセーじは曲の後でね、なにせ苦情が来ちまうもんでネ それではユインの「フォーカス」じっくり楽しめ！」

きみとの出会いと言う眼鏡をかけたとき

一瞬で世界が変わった

セピア色の景色

重い夜空 光らない星

表情のない人々 名前を知らない誰かの声

そう 眼鏡をかけたとき

全てが焦点を結んだんだ

なんて鮮烈で美しいんだろう

きみが見てた世界はこんなにもまぶしいとこなんだね

フォーカス きみに会えてよかったと

フォーカス いつか大声で叫べる日がきたら

フォーカス ぼくはきみの手を握り

2度とはなしたりはしないから

だって きみはぼくのすべての集中心

外は雪。でも室内は5月くらいの季候だ。

中3の受験生（いやな響きだ）である私は数学のワークを開いて
（開いているだけだが）ラジオを聞いていた。

家の中はすこぶる静かだ。

母さんは海外を飛びまわってていないし、父さんは空の上もしくは土の中。

部屋の中はユインの歌声で満ちている。

触れはしないが柔らかかそうな湯気が、ホットココアから立ち上つてはゆらゆらと消えていく。

すきだなんてやすっぱい言葉でしか伝えられないぼくを許してね
それでも精一杯で

きみがすき

だって

「きみはぼくのすべての集中心、か」

リモコンでラジオからCDに切り替えた。

「ミッシング リンク」が流れ出す。

ユインは今年の春に突然現れた歌手だ。まあ陳腐な言い方をすると、それこそ彗星みたいに。

男で、私より5つ年上の20で、一度も染めたことがないという

（真偽のほどは定かではない）栗色の長めの髪をなびかせて、楽しそうに歌うやつ。

私の今の片思いの相手だ。

「ミッシング リンク」はそのデビュー曲で、私が一番好きな曲なのだ。

覚えてないなら思い出させる

ぼくは確かにここにいた

わからないならそれでもいい

だからぼくを忘れないで

琥珀の渦の真中で

悲鳴みたいに叫んでた

喉が裂けて声が出なくても

それでもぼくは叫んでた

ぼくは今さがしてる

いつか出会うべきあなたを

ぼくはいつでも信じてる

いつか出会えたあなたなら

ぼくですらもわからない

琥珀の渦にいたわけを

きつと教えてくれるだろう

今どこにいるんだい

今誰と一緒にいるんだい

今何をしているんだい

ねえ ぼくの声は届いていますか

迷わないように ぼくはいつでももうたうから

あなたと出会うみちしるべ

わけがわからないと評価されることが多いこの歌はあまり人気ではないが（けれどもユインのビジュアルはしっかりと大衆の心を掴

んだ）私はこの歌が好きだ。

ユインが叫んでいる気がする、生々しい歌。

よほどの思い入れがあるのか、（めったにうたわないが）この歌をうたう時のユインは苦しそうだ。

アイドルというモノはみんなツクリモノの表情でうたうとばかり思っていた。

ユインの、吐き出すような本当に苦しそうな表情は、私の中のなにかを動かした。

街角ではじめてユインを見て（と言ってもＴＶだが）それ以来ずっと、私はユインに恋をしている。

叶わないことなど百も承知だ。けれど部屋で思いを吐露するくらい、日本の基本的人権が許してくれるだろう。

「す」

ぴんぽーん

き、まで言いきらないうちにチャイムが鳴った。

どうやら日本の基本的人権が許してくれても、うちの母さんは許してくれないらしい。

また妙なもの送りつけてきたんだろう。前は呪いがかかってそんな人形、前々回はガンクラブの割引券、その前はもう忘れた。

溜息をつき椅子から立つと、きいと軋んだ音がたった。

電気をつけていない（省エネ）廊下は冷え冷えとしていて、私は足早に玄関に向かう。

その時、なんでのぞき穴から確認しなかったのかとか、

一言も「宅急便です」といわなかったのは何故かとか、

色々と考えるべきことはあったのに、私は安易にドアを開けた。

そこには、夜が立っていた。

例えの話であって本当に「夜」が立っていたわけではない。

黒いニット帽に黒いサングラス、黒いロングコートに黒いズボン

に黒いブーツ。

サングラスと立て襟のコートから僅かにのぞく素肌が、異常に白く見えた。

まあぶっちゃけ怪しいわけで。

慌てて閉めようとしたドアを掴む手には、やっぱり黒い皮手袋。

「誰だ」

低く訊くと彼はむつつりと（どんな表情していようがこれじゃむつつりにしか見えないだろう）言った。

「永寿イオ。今日からあんたの同居人。わかつたらさっさとどけ」

「どくか！お前普通に考える中3女子が1人暮らしの家に黒づくめ男がきて今日から同居人だからどけだど？そんなこと信じられるかつ、信じて欲しければ証拠を見せろ！」

「俺としてはあんたの歳の方が怪しい。サバ読んでないよな？」

「失礼な」

170センチの長身と長く伸ばした黒髪と言葉使いが原因で、よく「ホントに中3？」と言われるが確かに私はまだ15年しか生きていない。

「まあいいや。あんたが成嶋ユキなんだろ？はい」

突き出される白い紙。

「なんだこれ」

「あんたの母さんからの手紙」

「は！？えつと」はろん、ユキちゃん。元気してる？突然だけどお母さんの友達のお姉さんの息子さんを預かることになったから全面的に4649ネ「って」

はろんってなんだ！日本人ならきちんとあいさつしろとか、4649って古いよ母さん！とかまあツツコミ所は満載だったがなにによらず、

「全面的によろしくって何がよろしくなのかみなまで書きあがれこの若作り——ッ——！！」

見事まっぴらに裂いた紙を丸めて家の中に投げ捨てた。（外に

捨てるのはポリシーに反する)

と、ずっしろとした重みが突然背中にかかり、バランスを崩して床に倒れこんだ。

「なっ、なんだ!？」

正体を見極めようと体をよじると、黒づくめの男がのしかかっていた。

「わっバカどけよ! 私はまだ食べごろには程遠い」

「…た」

「は？」

かすれた声で、黒づくめは言った。

「腹、へった」

ぶったおれるほど腹減らしてるなんて、どういう生活してたんだこいつ。

とりあえず玄関を閉めて黒づくめのブーツを脱がせて、リビングに持っていった。

電気のスイッチを入れ、暖房も入れる。

緩やかに解け始める冷たい空気を肌で感じながら、ニット帽とグラサンを外してやろうと手を伸ばした。

「やめ、ろ」

黒づくめは弱々しい声に反し意外にも強い力で私の腕をひきとめた。

「俺、寂光だ、から」

「帽子は」

「禿げて、るん、だ」

「嘘つけ」

そこまで嫌がるならしょうがないと思い、諦めてキッチンに立った。

数十分で簡易チャーハンとフカヒレスープが完成する。

こういうときは粥を作るべきだったかと今更思ったが、しょうがないのでフカヒレスープから飲ませてみることにした。

「おい、飲めるか」

訊くまでもなかった。

黒づくめはかつさらうようにスープカップを奪い取り、熱いつて！という忠告を無視してすごい勢いで飲んでチャーハンをがついた。

野獣かよ。3日間餌にありつけなかったライオンを連想する食べっぷりだ。

チャーハンを3皿とデザートのスィートポテトを7個食べ終わると、黒づくめはやっと人心地ついたようにソファに沈み込んだ。

マグカップに入ったコーヒースォファの前のテーブルにおいてやり、私はカーペットに座った。

「で、永寿イオ」

「何」

「あんた何者」

「曲者」

「何だそれ」

「なんだろうね」

噛合っているようで噛合っていない会話をしていると、ふと思う。

「イオ、お前の声ってユインに似てるよな」

空気が凍りついた。

軽い気持で言ってみた言葉にイオがカッチコチになるのを見て、
「まさかなー、あはは」と乾いた笑いを飛ばしてみるがイオはやっぱりカッチコチで、あまりの気まずさにテレビをついたら「ユイン失踪!？」というタイトルが右上に出ていて、女子高生が「いなくなっちゃうなってシヨkker」とか喚いていた。

まさか、まさかな。まさか、な。

「イオ...?」

「はいはいそーですよ俺は永寿イオで歳は22、仕事はアイドル芸名はユイン。よろしく!」

「うそだろ」

「ッ!?!?」

そんな爽やかによろしくされても!

ってか歳サバ読むなよ!ユインって20じゃないのかよ!

「逃げてきたんだ」

「は?」

私をパニックから引き上げたイオは、ニット帽とグラサンを外していた。

「エミコさんの子供がユインを知ってるとは、まずったな。まあ俺逃げてきたんでかくまって…っておい、あれ?おい、大丈夫か!」

本物のユインが目の前でぶらぶら手を振っている。

信じがたい現実には、私は意識をぶつとばした。

16・ブラウン管の残像 チャンネル1（後書き）

猟奇的な彼女と

悲観的な彼氏の

気が合わないすれ違いのラブコメ。（え）

17・ブラウン管の残像 チャンネル2

なんでうちの母さんと知り合いなんだとか、
なんで逃げてきたんだとか、

なんでよりによって家に逃げ込んだんだとか、

訊きたいことはたくさんあったけど、なんかもうどうでもいい。
人間疲れると、いろんなことがどうでもよくなるものなんだ。

「イオ」

「何い？」

嵐の後なんて生易しいモンじゃない。さながら戦争でもあった後
ようだ。

どこがって、キッチンだよ。

ブラウン管の残像 チャンネル2

86

「てめエは座ってあがれ！」

「なんだよせつかく人がブレックファストを用意しといてサワヤカ
な目覚め をさせてやろうと思って親切にも慣れない料理をしてや
ってるっつーのに」

「料理じゃなくて散らかしてるだけだろ」

「ふん、散らかってんのはこの部屋とお前の顔だ、俺は散らかって
ない」

「叩き出す」

繰り出した手刀はものの見事にイオを昇天させた。

そのまま捨てといて、ちゃっっちゃと朝メシ作って（2人分）（め
んどろ）学校へ行く準備をした。

わけのわからん同居も今日で4日目だが、いい加減理解した。
アイドルは夢の世界の住人であることが一番いい。むしろそうあ

るべきだ。

大体腹すかしてたのだった、事務所が失踪を発表する3日前から本当は失踪していて（ナマとかはビデオで誤魔化したらしい）追っ手を撒かないと私のうちに来れないから（スキャンダルだとか大騒ぎになるかららしい）うちに来るまでの間そこらをさまよってたんだとか。

バレたら大変だから店に入ってメシ食うこともできずに走りまわったもんだから、ああなったと言うわけだ。（カロリーメイトとかを自販機で買って食ったことはあるらしいけど）

この3日でベルリンの壁のごとくに大破されたユインのイメージに、もう相手がアイドルだからと残る傷をつけることをためらうのを止めた。

「おらイオ、メシ出来たぞ。ちゃっちゃんと食え」

「……ってエ……、お前本当に女!？」

「女だともさ。バターとつてくれ」

「はい」

「どうも」

「ジャムとつて、イチゴのやつ」

「ん」

「どーも」

なじんでる自分が空恐ろしいぞ。

目の前にいるのは一応多分人気絶頂アイドルのユインのはずなのだが。

「私は学校に行く。いつも言ってるが外に出るなよ」

「OK」

「……捕まるなら1人で捕まれよ」

「うわひどい」

キツチンの片付けは帰ってからやろう。なんかもう手を出す前から嫌気がさす。どうやったらこーなるんだ。

溜息をつきつつ靴をはき、玄関のノブに手をかけるとイオ「待て

よー」と言いながらリビングから出て来て、ひらひら手を振って、「
いってらっしゃい」と言った。

ここ3日続けられている光景だ。

イオの又けた笑顔を見る。

「いってきます」

これだけだ。

でもなんとなく嬉しい気がする。

何故だ。

多分、返事をしただけなのに、あいつがめっちゃめっちゃうれしそう
に笑うからだ。

「おー…はよ、成嶋」

「おはよう谷。知っているとは思うがそこは私の席なんだ」

「細かいこと気にすんな」

「昇天するか？」

「丁重にお断り致します」

どつかりと私の席に陣取っていた谷をどかし（実力行使）席につ
くと前の席のチェコが振り向いた。

「おはようユキちゃん」

「おはよう。何読んでるんだ？」

「ミカちゃんが貸してくれた雑誌」

開いたページに「ユイン失踪！？女の子たちの叫び！」とでかで
かと書かれていた。

のぞきこもうとするとずっしりと頭が重くなる。

「なんだよチェコ、ユインのファンなのか？この俺を差し置いて」

「谷、重い」

おまけに顎がささって痛い。眼鏡がずれる。

「うん。ユインの歌好き。ユインも好き」

「俺の方がカツコイイぜ？」

「顔だけじゃないよ。優しそつで器用そつでしょ？」

「えー、俺の方が」

「重いつつてんだろこの唐変木！」

「げおふうっ」

肘を思いつきりひくと鳩尾にはまったらしく、谷は奇妙な声をあげて昇天した。

うん、チエコ。

夢こわすようで悪いんだが、ユインはそんなにかっこよくないぞ。そんなユインを知っているのは私だけなんだろうと思つたら、よくわからないが気分がよかつた。

それにしても、なんであいつは逃げてきたんだ。

こんなにみんなに愛されているのに、何故。

芸能人は芸能人の悩みというモノがあるのだろうか。

フレームを押し上げて、閃くものは何もない。

「ユキちゃん、ユキちゃんってば」

「あーほつとけほつとけ。どうせイギリス辺りを旅してんだろ」

失礼過ぎる言葉に拳を振り上げれば、偶然谷の顎にストレートで入つた。

転がりまわる谷（舌をかんだらしい）を捨てておくと、ミ力が雑誌をとりやつてきた。

「ねえ、このでっかいゴミ、何」

チエコから雑誌を受け取つて、開口一番に幼馴染を指差して言う。

「金曜の可燃物ゴミに出そうかと思つてな。袋持つてないか？」

「あいにながら。不燃物の袋ならあるけど」

「そうか、じゃあ職員室にもらいに行くか」

「ちよつと待てよお前ら！無表情で真剣に人を殺す話してんな！」
失意のそこから蘇つた谷は、ミ力に襟足をがつつかまれて固まる。

「ど、どーも柴木ミ力さん」

「うん、どーも。もって来たかな？2348円」

「えーっと、6円ほど」

「そーかそーか、いよいよ「簀巻き川流し東京湾へのたび」が実行できそうだね」

「い”　いいいや”　ああああおー！」

どうやら妙に中途半端な数字は谷が1日に数円（もしくは数10円）ずつしかもって来ていないかららしい。

「それでは簀巻きの調達に行こう。きみのサイズにぴったりのがあったらいいね」

「ごーめーんーなーさーいー！」

「ごめんで済んだら簀巻きはいららない」

すまなくても簀巻きはいららないと思ったがいわなかった。谷は少し痛い目を見たほうがいい。

「ちよつ、何チエコもユキもその悟りの表情！とめてよ！」

「骨は拾ってやる」

「がんばってねー」

「う”　あああああつ」

ずるずるという音と共にその姿が消えようとしたとき、谷は突然叫んだ。

「ユキ！好きだからねーっ」

ミカの肩がぴくりと震えた。

「鏡見て出直せ」

「ひどいこの宇宙のアイドげふうっ」

無言でミカが繰り出した膝蹴りは、見事背骨にぶち当たったらしく谷はしばらく悶絶していた。

「谷くんの告白、今ので何回目だっけ」

「84回」

チエコの疑問に答えてやると、チエコはそっかと苦笑した。

「いい加減自分の程度ってものを知ればいいのにね」

うん、チエコ。

ぶつちやけ恐いぞその天使の笑みでそれを言うのは。

「おつかえりー」

「…ただいま」

これも3日間続けられている。

考えてみれば行きと帰りにアイドルに挨拶されるなんてすごいことかもしれないが。

「今日は学校どうだったー？」

なんかそんな気がしない。何故だ。

「いつも通りだぞ」

「ふうん」

イオがいる自体が激しく「いつも通り」とはかけ離れているが、いつものようにタメシを作って食べて、時計が8時20分を示した時だった。

ぴんぽーん

チャイムが鳴った。

「誰だ、こんな時間に」

「今度こそ宅急便なんじゃねーの？」

「かもな」

だが念の為のぞき穴をのぞいた。

濃いが柔らかかそうな茶色の髪と、色白な顔。耳朶に光る銀のピアス。

『だってあんた金もってそうだったし』

―あれだけ本気だって言ったくせに。

『キスもさせてくんねーような女だとは思ってなくてさ』

―どんな風に、あんたの目には私が写ってたの。

『あー？サセコにしか見えなかったぜえ？』

―…だいきらい。

「コウジ…」

忘れていたはずの名前がぼろりと零れた。

思わずドアを開けると、コウジは悪びれもなく笑い遠慮なく玄関に入ってくる。

「よお、久しぶり」

「何しに、来たんだよ」

思いがけず弱々しい声が出て、自分でも驚く。

「何って、やり直したくてよ。ユキが一番いい女だってやっと気付いた」

「今更…ッ」

「ほら、そういう気が強いとことかすっげえかわいい」

「…ッ」

「なあ、いいだろ？愛してる」

「どうせまた嘘なんだろ！？出てけよ！」

どん、とコウジの胸を突き飛ばそうとすると、コウジはそれをひよいと避けて右手で私の髪を人房掴んだ。

「何、する…ッ」

「まだ伸ばしてくれたんだ。俺がロング好きだったから」

ちゅ、とかすかな音をたてて髪に口接けられて一気に血が上る。

「違ッ」

「違いよばーか」

突然第3者の声がわって入って来た。同時に体が引き寄せられて、背中から抱きかかえるようにイオの腕の中に入れられていた。

「自意識過剰もいい加減にしろよ。俺がせっかく可愛いんだから切るなよって言ったんだ、まあユキならショートでも可愛いだろうけど」

「何言もがッ」

何言ってんだと言おうとしたら大きな手で口を塞がれた。思わず息が詰まる。

「てめえ誰だ!？」

「ユキに手エ出すやつに教える義理なんてねえな。さつさと帰れよ、お前が出る幕なんてねえ。」

それともなんだ、二度とユキの前に出られない顔にしてやるのか？」

イオが喋るたびに吐息が耳にかかって、背筋が震えた。

こめかみあたりに柔らかい唇を感じて、かつと体が沸騰しそうになる。

コウジはくやしそうに齒噛みをして、けれど慌てて去っていった。

「…ありがとな。もう、放せよ」

「やだ」

いつまでたつても解かれない腕に、更に力が入るのを感じて思わず身をよじった。

「は、何言って」

「これなら、見えないから」

「え…？」

「見ねえから、泣けよ。今お前泣きたいだろう？」

「は、馬鹿。なんでこの私があのからい、で…っ」

そういえば、気がついたらかたづいていたキッチン是谁がやったんだろう。

イオの手にある傷が、無言で疑問に答えていた。

熱い塊を飲み下したような感覚が喉に突っかかる。イオの腕にぽつんと水滴が落ちた。

「…れ？おかしいな、とまれよ。とまれって、ば…とまれよ、ばか…っ」

一度零れたものは留まることを知らず、私はイオにもたれたまましばらく泣いた。

「2年生の頃、秋まで付き合ってたやつなんだ」

春に道で落した生徒手帳を、拾ってくれた人だった。

その頃の私はこんな喋り方じゃなかった上に、男うけがかなりよ

かった。

2つ年上のコウジという彼氏を、散々自慢したものだった。破局のきっかけは簡単だ。コウジの浮気、それだけだった。

私には十分な理由だったけれども。

リビングで膝を抱えてぼつぼつと話した。イオはココアを飲みながらぼんやりと聞いて（いるのか？）いた。

「あんたさ、学校じゃ眼鏡かけてるだろ」

何でだよと目で訊くと、イオは自分の顔の目頭あたりを指でトンと叩いた。痕があるらしい。

「目え悪そうには見えないから度入りじゃない、それでそれだけの痕が残るとしたら重くてゴツイメタルフレームの伊達眼鏡」

こいつ実はシャーロック・ホームズなんじゃないんだろうかと地味に疑ったが、イオの言葉は終わりではなかった。

「伊達メタルフレーム眼鏡、黒髪美少女にそぐわない無骨な喋り方、中3女子にしちゃ嫌に鍛えられてる武術」

ユウジが来てからはじめて、イオの目が私の目をとらえた。

「よつぽど、悲しかったんだな」

「…なんで、わかるの…？」

「さあね」

「ひどいよ、アイドルのくせに」

「アイドルだと駄目なのか？」

「駄目だよ、優しくしないでよ。いつかどこかに行っちゃうくせに…！」

「行かない」

イオに力強く引き寄せられる。放したらどこかに行くんじゃないかと思うと恐くて、必死でイオの胸にしがみついた。

「好きに、なっちゃうから、止めて…っ」

「好きになってよ」

「やだ！手が離せなくなりそうで、怖い」

「放さなくていいよ。どこにも行かない。ここに、いるから」

悲しみを溶かし去るような温かい部屋で、まるで1つのものになるのを望んでいるかのようにお互いを抱きしめあう。

粉雪が、すべてを包みこむように降っていた。

唇に感じた熱は、私の知らない柔らかさで私を包みこみ、そのひとにひどく安堵した。

17・ブラウン管の残像 チャンネル2（後書き）

横暴な男に優しくされると、

身持ちの固い女でも案外あっさり落ちたりする。

ミツカーミ・ケストビッチ（大嘘）

18・ブラウン管の残像 ラストチャンネル

2人で抱き合って眠った夜に、イオは言った。

「ユインの曲って、全部プロデューサーが作詞・作曲してるんだ。あれは俺の歌じゃない」

幻滅した？と笑う。

私は言った。

「でも、イオが歌うのが楽しいって気持は嘘じゃないだろう？それに、1曲だけ「イオの」歌がある」

「何」

「ミッシング リンク。私の1番好きな歌」

「かなわねえな」

くつと苦笑して、イオは私を更に強く抱き寄せた。

「いつか幸せな「俺の」歌を作るとしたら、ユキのことを歌うよ」

本当は、気付いていたかもしれない。

目覚めたら、イオはどこにもいなかった。

リビングのテーブルの上に、銀の指輪と置手紙。
イオがしていたやつだ

“絶対に放さないって約束、守れなくてごめん。

けどぜってー迎えに来るから、待ってる。

永寿イ

オ”

こんなときでもエラそうで、それが溜まらなく愛しかった。

本当は、気付いてた。

私がイオに恋をするということ。

イオはいつか、私のところからいなくなるということ。

たった4日間の同居で、ずっずっしく私の心に入りこんできたや

つは、その日からテレビや雑誌の取材にひっぱりだこだった。

ブラウン間の残像 ラス

トチャンネル

“ファンの方にはご迷惑をかけて、本当に申し訳ありませんでした。

”

“ええ、自分の歌に自信が持てなくて、少し高飛びしてたんです。
”
ユイン、ユイン、ユイン、ユインの大氾濫。

街中にはそこかしこにユインの歌がインタビューの映像が流れていたし、新聞もネットもユインのことを書き立てた。

1月の私の受験が近づく冬休みに、ユインは突然アイドルを辞めた。
た。

それは本当に突然で、私は呆然とすることも出来なかった。
そしてユインがアイドルを辞めた次の日、分厚い手紙が届いた。

「成島ユキ様

突然いなくなつてごめん。

もうひとつ、ごめん。まだ会えない。

理由はたくさんある、その1つが俺の過去なんだ。

成島ケイイチを、ユキの父親を殺したのは、

俺だ。」

カッンと手から封筒が落ちた。

父さんは優秀な警察官だった。

私が10歳の時に、事故で死んだ。

少なくとも私は、そう教えられていた。

「高校生のころ、俺は手のつけようもない慌てた。

悪いことをいくつもした。

いつだったか忘れたけれど、万引きしようとしていた俺を止めたのがケイイチさんだった。

ケイイチさんは俺を交番に連れてって、温かいコーヒーを出してくれた。

しかも和菓子つきだった。

根っからのお人好しで、俺がポテチを盗ろうとしてたから腹が減ってるんだと思ったらしい。

変なやつだと馬鹿にしてたけど、なんとなく雰囲気が入って俺は交番に通うようになった。

当然、俺は仲間との仲が悪くなる。

やつらは俺がサツに全部チクってんじゃねえかと思ったらしく、俺を1人で呼び出してリンチしようとしたんだ。

俺は必死で逃げて、逃げている途中で見回り中のケイイチさんに会った。

俺の傷に驚いた恵一さんが急いで救急車を呼ぼうと、俺が走ってきた道に慌てて出た時、俺を追ってきたやつらのバイクと衝突してケイイチさんはなくなった。

俺が殺した。

ミッシング リンクは、ケイイチさんに捧げた歌だったんだ。

(そんなことで償えるとは、思ってたないけど)

だけどもめん、俺はやっぱユキが好きだ。

父親を殺したやつを、ユキは好きだって言ってくれるか?」

父親を殺したやつを、ユキは好きだって言ってくれるか?

きみがこぼした涙のカケラ

ぼくはまだ大事に持ってるよ

きらきら光る宝箱にいれて

誰にも見られないように

守るよ 今度こそ

好きだよ だれよりも

抱きしめたいよ 今すぐに

ねえ ぼくの歌 きちゃんと君に届いてる？

Please don't forget me .

Please remember .

I love you , I love you , for e

ver :

「ユキ、何聞いているの？」

ひよいとイヤホンを奪われる。

「あ、グッドサウンズの新曲。ファンなの？」

ちよつと聞いたサユは首を傾げながら訊いてくる。

「別に。いるならあげるよ、それも違うから」

「えーいらないよ。不気味じゃん、年齢も性別も不詳でしょ？」

「そうだね」

4月、私は高2になった。

イオは、去年正体不明の「グッドサウンズ」という歌手としてデビューした。

イオ↓イイオン⇨良音⇨グッドサウンズなんだろうから、無理矢理もいいところだ。

「もし好きだって言ってくれるなら、

頼みがある。」

同封されていた鍵と、住所。

私は今すぐにでもイオに会いに行ける。

けれど、

頼まれたから。

「俺が、本当に「イオの」歌をうたえたら、家に来てほしい。
俺はそれまで歌い続けるよ。」

なんてエゴイスト。

きつと私が死ぬまでイオに会いに行かなくても、彼は歌いつづけるだろう。

会いたくないわけがない。

言ってやりたいことが、たくさんある。

でも、まだだ。

イオはまだ、「イオの」歌がうたえていない。

翼が欲しかった。

躊躇いも何も全てを捨てて、イオのところへ飛んでいきたい。

イオに、会いたい。

なんて矛盾。

なんてジレンマ。

鈍く光る銀の鍵を見つめていたって、どうにもなりはしないのに。

ユキ

名前を呼ばれた気がして、慌てて振り返る。

いつのまにか暗くなった空をイルミネーションがこてこてと照らしていたが、人ごみの中にイオの姿はなかった。

あいたいよ P O W D E R S N O W

耳を疑った。

イオの歌だ。

「イオの」歌だ。

きみは憶えているだろうか
ぼくとかわした約束を
きみを抱きよせたあの日にも
こんな雪がふつてたよね
何よりも大切に
ぼくの全てで守るべきひと
とても大切な約束をしたのに
ぼくはばかだから
月の引力が引き出してしまう欲望には勝てなくて
このボタン　ひとつおせば
きみの声がきけるのに
あいたいと　泣きながら
血が出るほどに握り締めた拳をほどかない
あいたいよ　P O W D E R　S N O W
きみは確かにぼくの琥珀を開く鍵
そして　ぼくの世界で一番大切な人
うたつて　待ち続けるしかしてはいけないのに
重い灰色のむこうから
きみの声がきこえてこないかと
いくらそれに寄り添ったって
もう　きみの体温が思い出せないよ
あいしてるよ　P O W D E R　S N O W
いつも想ってる
だけど想えば想うほど
きみの悲しい毎日を
知らずに眠っていたならば
こんなに悲しいことはない
チャンスをくれないか　P O W D E R　S N O W
そしてらぼくは　きみを強く抱きしめて
本当に　2度とはなしはしないから

それまでぼくは 満ちた月にさらされて
きみが来るのをまつてるよ

イルミネーションのむこうに、薄ぼんやりと月が光る。
まるい、まるい月。

「ーッ、イオ…！」

滲んでいく月をひと睨みして、私は走り出した。

イオ、イオ、イオ。

私の大切なひと。

自分の体と心が別のものになってしまったかのようなだ。

体だけがこんなに焦って、心はひとつも波立たない。

けれども引力に引き寄せられるように、私は走った。

今日は、満月だ。

あの歌が本当なら、イオは…。

「…っ、ユキ!？」

本当に、いた。

マンションの私の部屋のドアの前に、もたれるように座っていた。

「2、3言いたい事があるの」

切れ切れの息を整えて、顔を俯けたまま低く訊いた。

「…何」

「私の名前はSNOWのゆきじゃなくて、幸せに希望の希で幸希」

「そ、そうだったんだ」

「なんで急にいなくなったの」

「いや、ユキの元カレに顔見られたから、ほっとくとユキまでスキ

ヤンダルとかめんどーなことにまきこまれかねないと思って」

「そういえばグラサンとニット帽つけてなかったよね」

「う、うん」

「あとさ」

「うん」

「すき」

イオがたちあがって、息をのむ気配が伝わった。

「…ユキ？」

「好き」

「ユキ」

「好きだよ。イオが、すき」

顔をあげてまっすぐ目を見て言うと、今度はイオが目をそらした。

「俺、は…」

「馬鹿じゃねエのこのあほんだら！」

「は？」

突然啖呵をきった私に、イオは呆然とした。まあ当然か。

「どうせ私の父さんどーのこーのって言うんだろ！？そんなこと関係あるかボケ、私はそれでもイオが好きなんだよ！私がいいつつたら良いんだ！」

「俺には、ユキを幸せにする自信がない。」

それでも一緒にいたいと思ってくれたら、

俺のところへ来てくれ。

俺は、待ってる。」

「大体ねえ、あんたに幸せにされなくたって自力で幸せになるっつーの！」

滲んでいたものが、零れた。

「…幸せにある方法が、あんたの隣にいることなのよ」

「ユキ」

「馬鹿に、しないで。私の名前は幸福の幸に希望の希だよ。自力で幸せになって、ついでだからあんたも幸せにするくらい、楽、勝ッ」

イオに強く引き寄せられる。

「ごとんと重そうな音をたてて、私の腕から鞆が落ちた。もう忘れてしまっていた、イオの体温。」

「ごめん」

イオの吐息。

イオの、唇。

「寂しかったんだぞ」

「うん」

「約束、やぶりあがって」

「うん、本当にごめん」

「今度こそ、本当にいなくならないんだよな」

「誓うよ」

「…やぶつたら、畳針1万本だぞ」

「心得ました、お姫さま」

あなたと見た粉雪を、自分で自分を抱きしめながら見つめなくてももういいんだ。

銀色の鍵を握り締めて、あいたいと涙をこぼさなくてももういいんだ。

あなたの歌を聞きたびに、切なく胸を締め付けられなくてももういいんだ。

ブラウン管の中のイオの残像は、もう追いかけなくなっていていいんだ。

ふれられるあなたが、目の前にいるから。

18・ブラウン管の残像 ラストチャンネル（後書き）

えー、多数質問がありました「そんな2人の人間関係」の2人は、この小説に出ている谷シロウと柴木ミカのその後です…。
けっこう時間関係前後している話が多いですが、基本的にそう言う話は知っていなくても読めるよというくらいのもごぶごぶ。

次は準本編投稿できたらいいなあと頭を抱えるKです。

19 . ハチ公は焼き鳥のために

あのさ、

今時廊下にバケツ持たせて立たせるとかレトロなりンチありなの。
時代は今レトロブームなのかY o

ってかさー、

やたら自慢つたらしくしてた話に出てきた化学式が間違ってたのを指摘しただけでのびたよろしく立たされるのは納得いかない。

ために

ハチ公は焼き鳥の

もちろんバケツ持ちつつづけるはずなくて（乙女の細腕にあの重さが耐え切れるわけがない）（は？）とととほっぽりだして校内探索の旅に出た。

母をたずねて400m！（マ・コ——）（あたいちび・るこ好きだよ）（違）まあ校内に母さんいたら私ははったおすけどね。ごめんよマルコ。

見つからないうちに身を隠そうと思って窓から裏庭へ飛び降りたら（1年は教室1階）すんとナイス着地　した茂みの中にゴールデンな何かがあった。

スライムだ・・・！

ドラクエだよドラクエ！（違）もしくは天使っちのゴールドうちくん！（大フィーバー）いやああらっていつか生態実験してみたいと前々から思ってたのよ。

「それでは早速」

思い立ったが吉日、ここで会ったが100年目。

「ゴールドスライムもしくはゴールドうちくん捕獲！」

しまった私素手じゃんゴム手袋いるよと思ったときにはもうゴールデンをしっかりと掴んでた。

やっべえと思うよりも速く、ゴールデンからナワナワしたオーラが噴き出てあらやだプリンセステ・コー？（意味不明）

「つてエな、てめえ何しあがんだ！」

…なんだ人間かよ。（気付けよ）振り向いて牙をむいたのは眼鏡かけた少年でした。つまんなーい。

「ゴールデンスライムかゴールドうんちくんかと思って」

「この色はゴールドじゃねえだろ、ハニーカラーだろ！」

「あんまり頭沸かせてると血管切れちゃうやだ若いのに生活習慣病？」

「若い生活習慣病患者が増えてるから、アメリカの医者どもが頭抱えてんじゃねえか」

「よく知ってるじゃない」

「ジョーシキ」

はちみつ頭（森の露出狂でもよってきそうだ）はふんと鼻を鳴らしてから元の体勢に戻った。ムカついたから蹴りいれてやるーかと思っただけPC抱え込んでたから止めた。

いやべつに弁償できないからとかじゃなくて（麻川家をなめんなYo）なんか不穏なおいがしたのよ。かなり臭かったのよ！

「何やってんの？」

「ハッキング」

ビ————ンゴオオオオオ！！！！

ハッキング！

それってあれよね他人のコンピュータに侵入してウイルスとかばら撒くやつ！（大フィーバー）

（→はあくまで麻川サキのハッキングのイメージであり、事実とは若干（？）異なります）

「誰のコンピュータに！？」

「科学の山岡」

「なんだ国防総省とかじゃないのか」

つまらん。(ライ)

「俺がハッキングして試験問題見たんじゃないかって言われてムカついたから本当にハッキングして試験問題全部AV嬢の写真といれかえてんの」

「へえ、廊下にのびたよろしく立たせるなんて古風なリンチするからコンピューターなんか使えないのかと思ってたよ」

「…誰の話」

「山岡・べつとり・シヨウジ」

「ぶっ」

唾飛ばすな！

「ぶ、あはははははは、はははははは！山岡・べつとり・シヨウジって、くくっ、はははははは！」

ひたすら笑いつづけたはちみつ頭の笑いが収まった頃に「笑いの女神は去った？」と訊いたらまた笑われた。

口塞いでやろうか。(死ぬって)

「はーっ、マジうけた。あんたアレだろ？入学式のムツソリーニ宣言の子」

「未来の紋高のヒットラー様現在はムツソリーニ様麻川サキ様よ！」

「(様3つつ…)はいはい麻川ね」

「麻川様つつてんでしようが！」

はちみつ頭を横にはったおしたらあっけなく吹っ飛んで、しばらくして「何するんですかぁ」と間の抜けた甘い声が帰ってきた。(何事！？)

「眼鏡どこかにいっちゃったじゃないですかぁ」

Mr・マ・ツクとプリン・ステンコーのコラボレーションもびつくり。

あんた誰ですか。

いやナリはさっきのクソモとい排泄物生意気なはちみつ頭なんだけど、眼鏡を取ったらきつと吊りあがってた目尻が落ちて鋭かった

目がやたらつぶらに。

眼鏡を取ったら目が無えとはよく聞くけど目がでっかくなるなんて聞いたことないよ。

「さっきのと同じ人物？」

「あ、はい。ボク眼鏡かけたら性格がちょっと変わっちゃうんです」
「ちょっとどころじゃないＹｏ　３６０度くらい違うから！（なんてありきたりなボケを）」

「そうなんだ…」

「そうなんです。あ、ボクは１年Ｆ組の安倍セイヤと」

「Ｆ組って言ったね今」

「（びくつ）は、はい」

Ｆ組って言ったら情報科じゃん！

将来のために経済とかコンピュータのこととか日夜学んでる天才集団！（私にはかなわないけどＮｅ　）

どうりでハッキングとか普通にやってると思ったら！（　情報科の人でも普通にハッキングは出来ません）

「あんた！」

「はっ、はい！（安倍なんですけど…）」

「今日から私の犬になりなさい」

「は…い…？」

「ハッキングがばらされなくなったらね」

「で、でもほら証拠とかありませんし！」

「これなーんだ」

はっはーん、こんなこともあるのかとしいたわよムービー写メ！

備えあれば憂い無しとはいうけれど、麻川・ムツソリーニ・サキは備えすぎ。

５月のよく晴れた空の下、未来のヒットラーは忠犬八チ公にも勝るとも劣らぬ有能な犬（下僕…？）をゲットした。（ちゃらららっちゃんちゃーん）

廊下からそれを眺めていたリナは思った。

なんか楽しくなりそうだなあ、今度から重要事項は帳簿につけよう。

その隣でリナにかなり苦しい拘束をされつつそれを眺めていたレキは思った。

なんやあいつら世界制服でもするつもりなんやろか。今のうちにとりいっとこか。

それを後から聞いたアキは思った。

むしろ世界滅びるんじゃないの。

「なんやまた楽しくなりそうやなー」

「俺はもう嫌気がさしてるんだけど」

「なんやせつかくサキが忠犬ゲットしたんさかいお祝いしよーや」

「忠犬ハチ公は焼き鳥欲しさに主人を毎日駅まで迎えにいったんだよ」

「そうなん!？」

「いや、やつがそんなこと言ってたような…(トリビアの宝庫がアイツは)」

「サキは焼き鳥やるより「迎えにこんと餌はやらん!」つつータイプやと思うねんけど」

「それは俺も同意するけど、兄貴はその妹の兄だから」

「(そういううちみも兄やん)(とは恐くて言えへん)」

19・ハチ公は焼き鳥のために（後書き）

えー、人物が増える増える。

鼠算が増えていきますもうどうしよう。

いつか整理しないといけません。

Kの頭のなかでもごちゃごちゃ。（笑）

20・ 腹黒ハザード

紋高1の腹黒って誰でしょう。

麻川アキでしょうか。

いえいえ。

幟堂リナでしょうか。

いえいえ。

案外安倍セイヤでしょうか。

いえいえ。

その人の名前は二階堂サトル。

けっして酒の名前ではありません。

腹黒ハザード

『は？お披露目会？』

『そう、執行部のメンバーが決まったから麻川ちゃ、様に紹介しておこうと思ってるね（ああつぶないい）』

『ま、気が向いたら行行ってやってもいいわよ』

『じゃあ放課後に』

ま、不安が無かったわけじゃないんだけど。

『こつも見事に裏切られると笑いたくなるね』

現在時刻7:03。

『笑う余裕があるなら仕事の1つや2つ片付けてくださいよ会長』

『だめー、サキちゃんがないとやる気出ないー。それよりサトルもよく落ちついてられるよね。サキちゃんだよ？副会長が2人いるなんて知ったら毒殺されるかもしれないのにさ』

『俺は毒殺されるほど浅はかじゃないし、第一副は2人いるって説明しておかなかった会長が悪いんだから、万が一毒殺されたら夢枕

に立ってやりますから安心して下さい（にっこり）」

「（笑えない…）」

てきぱきと仕事をこなしていくサトルは休み無く手が動かす。見た目は中の上なのにあのサワヤカーな雰囲気と嫌味のないフェミニストなところでけっこうモテるんだよね。

ま、それでもサトルの浮ついた噂って聞いたことないけど。

「サトルはさー、好きな人っていないの？」

「…会長、頭のネジ飛びました？」

「あー大丈夫いつも飛んでるから」

なんとなく訊いてみたくなっただけなんだけどねー。

「好きな人…そうですね、いないと思います多分」

「あいまい」

「Me」

「違うIの格変化じゃないから」

「わかってますよ（にっこり）」

ほんと、こういうのを腹黒策士っていうんだろうな。もう歴史の影で活躍する参謀タイプ。ってことは僕はサトルの思い道理に動かされてる傀儡か。

そういうのも悪くないけど。

「サトルって性格悪いよね」

「それはどうも」

ほめてない、ってつつこむのも面倒でデスクに突っ伏したら、どかばしーん

「来てやったわよ幟堂！」

生徒会室のドアってわりと重いんだけど、さすがサキちゃん。見事な開けっぶり。

「麻川様まだ学校にいたんだね」

「今まで江崎とわんこそば早食対決してたから」
それはまた個性的な。

「で、私に紹介したいやつって誰よ」

「えつと他のメンバーは帰ったんだよねもっ」

きみがあまりにも遅いから。

「ふん、根性がないわね！」

根性の問題じゃないと思うよ。

「それでね、この人がきみと一緒に副会長をやる二階堂サトル」

「ストップ、今なんつった」

「え、二階」

「違うわよその前！」

「きみと一緒に副会長をやる」

「副って1人じゃなかったの」

「1人だよ。男と女1人ずつ」

「2人だろ（怒）」

あらやっぱり怒っちゃったか。

さあてどうしようかなあ、またシンイチの時みたいに戦争が起きなきやいいけど。

「で、あんたが二階堂サトシ？」

「サトルです」

向かい合った2人から火花が飛び散ってきそうであとさずる。

「どうでもいいわ！こうなったらバトルロワイヤルでどっちが正しい副会長か決めるわよ！」

決めなくていいんだけどなー。

「それは構わないけど」

構えよー。

「ここで戦うにはいささか無理があるので、隣の副会長室で思っ存分お手合わせ願えますか」

「了解したわ」

何する気だよきみたち。あのね、生徒会室って十分広いんだけど。呼びとめられるはずもなく、2人が副会長室に入って数十分。

最初は壁に張り付いてた僕もつまらなくなり（生徒会室および会長室、副会長室は防音バッチリ）そろそろ帰りたいなあと思って

いたところに突然ものすごい音をたてて副会長室のドアが開いた。
何事かと思えばサキちゃんが目キラキラさせながら「私先輩に
一生ついて行くわ!」と叫んだ。

えーっと、うん副会長室のドアも重いんだけどね。

呆然としていたら「じゃ、そういうことで幟堂」と言っさつさと帰っていった。

副会長室からいつもの笑顔でサトルが出てくる。

「サトルって性格悪いよね」

「俺は会長の脳内回路の謎が知りたいです」

つまるところ、紋高1のストマック・ブラックの貴公子は、未来
のヒットラーが尊敬するほどあらゆる意味ですごい人なのだ。

20・ 腹黒ハザード（後書き）

恐らくKの小説至上で最も恐ろしいと思われるストマック・ブラ
ックの帝王です。

黙々と人員増加中。今ならお得な特典もついています。（いらん）

21・ 幟堂リナと信者の意思

「…会長、また女性のこと考えてますね」

カツ、コッソ。

「サキちゃんのことだよ」

コッ、カツ。

「またある意味高嶺の花を」

カツ、カツ。

「もつと手ごわくなつたよ。あの安倍くんを味方につけたからね」

コッ、カツ。

「安倍くんってエクセントリック・クラス（略称エククラ）で有名なF組の？」

カツ、コッソ。

「安倍くんって言ったら小学4年生でアメリカの大学に飛び級入学して6年生の冬に卒業して帰ってきたって言う天才児ですよ」

カツ、コッソ。

「そうだっけ？」

コッ、カツ。

「知つときましようよそのくらい。あ、チェックメイト」

カツ。

幟堂リナと信者の意思

「えーちよつと待って今の無し！」

「駄目ですよ今の無しって無しにするの何回目なんですか」

覚えてナッスイ。

「ちよつとサトル冷たいこと言わないでよ」

「はいはい、13勝2敗5分けて俺の勝ち。もういい加減にしませ

んか」

「やだもう1回やるー」

「ってかてめえら」

さっきからずっとドアの前に立ちっぱなしのシンイチくんの堪忍袋の緒がぶつち切れたらしい。ま、彼の堪忍袋ほどちっさい袋って見たことないけど。

「素直にチェス板でチェスやれよ！」

将棋板でやって何が悪い。もとはほとんど同じじゃん。

「まずそこにツツこむあたりがなんとも…」

フチ無しの眼鏡を押し上げながらサトルが呟く。

なんとものは続きはなんだい？（にっこり）

「それより幟堂！」

シンイチくんが掴みかからんばかりに怒鳴ってきた。要件は大体見当ついてるけどわざと笑顔で「何？」と返す。

「てめえだろ俺のことポスト幟堂とかいいあがったの」

「えええ——何のこと？」

「上目使いに語尾だらだら延ばして喋るな！」

サトルが撒きこまれないうちにとチェス駒と将棋板を片付けはじめた。

それ学園長のアンティークだから壊れたら困るしね。

「あれから俺は毎日毎日麻川サキとかいう女に追いかけて大変でっ」

「あのコ、麻川レキの妹でもあるよ」

レキの名前を出すとおもしろいくらいシンイチくんはがっちょちに固まった。

「レキの…いやレキ先輩の…おと、妹…？」

今「レキの弟？」って言おうとしたね？

わざわざ直すところがシンイチくんらしいけどそこまでヘタレ根性染み付いてるんだね。嘆かわしい…。

「あと副会長でもある」

「は——っ！？聞いてねえよそんなの！」

「言っていないから」

「白々しいんだよてめえは！」

じゃあそのうちここに来るんじゃないかねえのかよとじたばた暴れ出したシンイチくんは、問題がすりかえられていることに全く気付いてない。

「なんと言つか…楽しい」

「Sに目覚めしないで下さいね会長」

ごめんもう目覚めちゃってるかも。

「僕がSになつたらサトルMになつてね」

「嫌ですよ俺はアブノーマルな世界には足を突っ込みたくないですから」

「副会長の片割れなんだから会長をサポートしなさい」

「そんなところまでサポートしなきゃいけない義務も義理もないです（にっこり）」

母さん、日本の冬は寒いです。

そうこうしてるうちに生徒会室のドアが開き、サキちゃんと安倍くんが入ってきた。

基本的に副会長の仕事に愛がないから平気で遅れてきて大尊敬して止まない（本人談）サトルにはほ仕事をやらせてる。

極めてつけにもし仕事ほんとやっちゃってないけど（私は存在自体が自然保護だから、らしい）の途中でシンイチくんを見つけてもしたら、

「江崎！」

「げ、麻川サキ」

「やっと見つけたわよ今日はPKで勝負するんだからね！」
ほんとに全く仕事をしない。

紋高の中田にPK戦を申し込むなんてまた滅茶苦茶な。

まあその滅茶苦茶さが気に入ってるんだけど。

意気揚々とシンイチくんを引きずっていくサキちゃんと、諦めたように引きずられていくシンイチくんと、その後をおろおろついて

く安倍くん。

いやあ、ブレーメンの音楽隊みたいだねえ。（謎）

「会長はなんだかんだいって江崎くんのこと大事に思ってるんですね」

「そう?」

「とぼけたって無駄ですよ。今日は6月18日で江崎くんの誕生日です。女性にプレゼントをもらって極めつけはあの取材陣、同性からの反感を買いやすいでしょう。」

なるべく女性の方々に追いかけるないように長時間生徒会室にとじこめて、麻川さんに捕獲させれば女性の方々はプレゼントを渡すタイミングがないし、帰りが遅くなって取材陣や何やら物騒なことを考えてる人も減らせますし」

「…僕ねえ、察しのいい人って大好き」

「それはどうも」

そう、おとうとであるシンイチくんのこと、僕は大事に思ってる。

だいきらいだけどね。

21・ 織堂リナと信者の意思（後書き）

ハリポの1巻タイトルと並べてどうぞ。（笑）

22・ニアミス・お嬢の恋愛講座

多分、

認めたくないだけなんだろうけど。

ニアミス お嬢の恋愛講座

アキだ。いや秋ではなく、今は夏。

こんな暑苦しい時によく麻川氏は涼しげにサッカーできますね。すごいよ。

アキだからか。あ、江崎と競ってる。

カオルはぼーっとしてんな、ぶつか…った。あほですかあいつわ。(あほです)

やあカツコイイですな麻川氏、あたいホの字しちやいますよ。(古い)

視聴覚室のエアコンフル稼働させて(天国。ヘヴン!)校庭で玉蹴りもといサッカーに勤しむ(大会に助っ人として参加するんで練習中)アキを目で追う。

視聴覚室って鍵壊れてっから開いちゃうんだよねではなく、針金で泥棒よろしくピッキングしました。(悪)開いちゃうもんだね。内側からバッチリ鍵かけたから俺と同じことやるやつくらいしか入れまい。まさか校内で堂々とピッキングするやつもなかなかないだろうし。(俺は例外)

カチっどかずぱんっ

「今日こそは何か職堂のボロをみつけて見せるわよ!」

いたよ。

何きみもピッキングしたんですか。そんな堂々とドア開けて入ってこられてもっ。

「相変わらずすごいですね、それ…（犯罪まがいに）」

「それなりに金はたいしたからね！すごいでしょうこの合鍵製造機」
俺よりすげエ！

ピッキングどころの話じゃないってそれ、犯罪なんじゃないの？
モデルガンみたいの（多分合鍵製造機）を持った1年生女子とその後をおろおろついてくる1年生男子。

ああ…、ご主人様とわんこね…。（一発でわかる雰囲気かもし出してるよ）

わんこがびくびくしながら持ってきたらしいノーパソ起動させる横で、お嬢がこっちを向いた。

「誰あんた」

先輩にも物怖じしねえこの態度。

「名乗るほどのもんじゃあございせんよ」

「ふーん」

納得しちゃうのかよしかも満足そうに鼻鳴らすな。

「サッカー部みてんの？」

「そうデイス」

「…好きな男でもいるの」
ごつつつ

窓枠に激しく頭をぶつけてあまりの痛みにトリップしかける、あつ川の向こうで死んだパトリシアン（アリゲイター）が手を振ってる。（ワニが手を降れるんですか）

「はっはーん、凶星ね？」

「3分の1くらいは」

「残りは」

「意外過ぎること言われたからかな」

「矛盾」

「そーだよ。お嬢は気持悪くないの」

「ドジョウよりウナギのほうが好きだわ」

ドジョウじゃないよ、お嬢だよ。

「男同士で気持悪くないかって言いたいんでしょ」
わかってんじゃない。

「そ」

お嬢は窓の外に視線を投げて、言った。

「私には関係ないし」

「まあそうですね」

完全シカトされてるわんこがうるたえてますよ。

「なんか、悪いことって気がしてなんないんですヨ」

「なんで」

「相手は美形で金持ちの長男じゃないけど男だし」

「相手が迷惑がつてんの？」

「さあね、言ったことないからわかりません」

「ふーん、じゃああんた馬鹿なのね！」

何故SOOなるのー？

お嬢の思考はミステイク。（お前もな）

「相手が嫌だつて言っていないのに悪いことのよーな気がするって、あんたは神様なの？いいこととか悪いことってあんたが決めるわけ」
なるほど、ミステイクなのは俺なんですか。

「ま、そうですね。でもぶっちゃけまだ好きかどうかわかりません」

「『尊敬、友情、独占欲と恋愛感情は表裏一体でありながら非常に近いものである。しかしそれに境界線をひくのは自分自身であるのだから、他人に「これは恋か」などと野暮なことは訊くべきではない』」

「…ゲーテ？」

「麻川レキ」

あいつか。

まじかまじかまじでか、なにそれレキきみ顔に似合わずロマンチスト！？

「私にはさっぱり役に立たないオッサンのたわごとだけど、あんたにはちよつと意味があるんじゃないの」

そうですね。

確かにその通りです。

うしろからわんこが目エキラキラさせて「かっこいい」って唇動かしてるよ。まあ俺から見てもお嬢はカッコイイよなかなか。

「そっか、なら大告白でもしてきますかね」

「せいぜい頑張れば」

「どーも。ところでお嬢はわんこ連れて何しに来たの？」

「幟堂のコンピューターにハッキング」

うわあ。

それまたデンジャラスな、幟堂って生徒会長でしょ。

なんでってそれはさすがに訊かないよ俺ちびっちゃうかもだし。

（埋まれ）

ああ、後のわんこもそんな泣きそうな顔すんな。大丈夫未来は案

外明るいZe

「お嬢ありがとね、なんかふっきれた」

「崇め奉りなさい！」

「そーしとく」

俺の好きなやつは、

偶然にも同性で同級生の、麻川アキという人間だ。

22・ニアミス・お嬢の恋愛講座（後書き）

だいぶUP遅れましたすみませんごめんなさい。

ユウヤとレキはマブダチです。（古い）

でもサキが一体誰かは知ってるように知ってません。

23 . いつかの雨の空の下

きつと

あんたは

おぼえてなんかいないんだろうけど。

いつかの雨の空の下

歌が聞こえる。

電車の窓から見える赤い屋根なんてそこらじゅうに点在してるのにいちいち住んでた家に郷愁覚えてたらきりがないんじゃないの。声変わりを過ぎたはずなのに、恐ろしいほど美しい高めの旋律が、夕暮れの公園に細くひびいていた。

鞆を肩にかけなおし、音源を探してみるのはちょっとした興味。ふいに歌が止んで、残ったのは少し音量の小さくなった旋律。多分、鼻歌に切り替えたんだろう。

微かになりつつある旋律だけを頼りに、目だけで音を追った。

夕日と向き合うように、少年が立っていた。

それは、俺より背が高いはずなのに、

流れ出す空気は異常なまでに幼く。

そして、その少年は、

死んだ猫を抱いていた。

「きみはじめんにかえるんだよ」

鼻歌が途切れ、言い聞かすような甘い少年の声。

後姿からみる制服は、同じ学校の高等部ものなのに、幼等部の生徒じゃないかと疑わずにはられない。

「ほら、ゆうひがきれい。きみはかみさまにシुकフクされてるんだね」

意味すらわかっていないんだろう単語を操る声は、聞き覚えがあるようで、ない。

「ぼくもかえりたいんだけど、だめ。あのね、ゆずきせんせいだめだよっていうから」

ごめんね、といいながらしゃがみこんで地面を掘る。

そばに転がつてる石を使えばいいのに、白い手で少しだけ柔らかい地面を掘り返す。

痛くないとでも言うわけ、それとも何？あんたの指には神経通ってないの。

声は、出ない。

鼻歌が流れ出す。

赤い屋根の家。

柔らかい音が、透明に空気を浸して。

気がついたら、その意味不明な同級生の隣で穴を掘っていた。

同級生は不思議がりもせず、ただ

にこり、と、

見たこともないような笑顔で笑って、地面に視線を戻す。

優しい手で地面に葬られていく猫はなんて幸せなんだろう。

「アキーー！！！」

ごっつっ

「おはようごきげんようそしておはようこんにちわ！ちょっと聞い

てよ！」

「…何」

朝一番に下駄箱に激しく額を打ち付けたときの気分？最悪に決まってる。

人間台風みたいなレイに巻き込まれるのはもういい加減なれてるつもりだから、こうやって朝イチに出てくるのがどんな頼みことでも聞き流せる。

「サッカー部の助っ人よろしく！」

わけはない。

「断る」

「うわお秒殺だぜチエケラ」

ゆかいに額をぺしりと叩いて、それでもレイは諦めない。

「なんでーねえなんでー、もうかりまつせー？」

「疲れる。泥だらけになつて球追い掛け回す競技のどこが楽しいわけ」

「そりやばっち青春味わえるト・コ・ロ」

「そういえば今日筆箱の中にカッターナイフ入ってたんだっけ」

「えっ嘘恐っ！ワイそれシャレになつてないよ！」

背負つてたナツプを探るふりをしてやったらレイは飛びさすって離れて、

「あ」

「「ああ！？」」

激しく誰かと衝突した。

「痛っ…なんでそんなとこにばけつと突っ立つてんのよ白石！」

下駄箱だからにきまつてんじゃん。

「ご、ごめん。ちよつと考え事してて…、な、ナイスタツクルでしたよ紫月…」

だいぶキツくぶつかつたらしく、もんどり打ってるそいつの顔を見た時、俺の全てが停止した。

「ちよつと平気？保健室連行すべき？」

「おかつつあん、俺あまだブタ箱にはぶちこまれたくねえぜ…」

「じゃあさっさと立って退く！他の人の邪魔になるでしょ」

「それわキミもだと思いマス」

どかつと背中に蹴りを入れられ、半泣きで教室に上がっていく。そのいつを見送った後、レイはやつと俺のおかしさに気付いたようにふりむいた。

「？アキ、どうかしたわけ。白石と知り合い？」

「…いや、別に。アイツ白石っていうのか？」

「そ、白石ユウヤ。中学生の時二回同じクラスだったよーな。おもしろいけど影薄いんだよねー」

それはあんたとあんたのクラスのメンバーが濃すぎたからです。

「白石って」

精神的に病んでる人？

言葉が唇に絡み付いて出てこなかった。

いつも平気なはず。

何故。

「レイー！」

「あ！？何あんたまだいたの」

「借りてた本！おもしろかった、サンクス」

レイの頭に軽く単行本を叩きつけて笑う。それは、昨日のやつと同じで、全然違う。

赤い屋根の家。

歌ってたの、あんただろう。

猫を土に還したのは、あんただろう。

「あ、あと白石、ユウ兄が帰りにこっち寄れってさ」

「リョーカイ。ところで遅刻しますぜお2人サン。いちやつくのは後でもよろし」

「撃ち抜くぞ貴様！」

振り上げたレイの腕からぎゃあぎゃあいいながら逃げてくやつは、確かに高校生だった。

「アキ」

「何」

「気になるの？白石のこと」

「……別に」

ふうん、とレイは見透かしたようなあいずちをうつて、にやりと笑った。

それからレイは、白石の話をし続けた。

血液型とか誕生日とか、そんなん。

黙って聞いている俺をおもしろそうに見つめながら話した。

その日の午後、雨が降った。

学校から帰るの、めんどい。まず傘さして右手が塞がるのが気に食わないんだよね。

やや小ぶりになるのを待って、学校を出る。

右手には青い折りたたみの傘。

赤い屋根の家。

足が止まる。

公園のベンチで、曇天を見上げて歌を謡う少年がいた。

見間違えるはずがない。

白石ユウヤ。

上げかけた声は、唇に絡まって止まる。

「ああいおそらがみたいなあ」

それはまるで、心を持たないはずの機械が心を持ってしまったかのような違和感。

「ぼくがみたいときに、そらはいつもあめなんだ」
ひどく幼くて、甘い。

「ぼくがね、かみさまにきらわれてるから」
感情のこもらない声。

とつさに、彼の上に傘を突き出した。

白石は、傘の青だけを見つめて、ふわりと笑う。

「そらが、はれたね。きれい」
よく見なよ。

この青は、人工の青だろう。

あんたが見たい青は、こんな色じゃないはず。

空から、銀色の棒が突き出してるわけない。その先を握る人間がいるはずがない。

「俺を、見るよ」

搾り出した一言は、雨音に掻き消されて余韻も残らない。

「麻川アキくん？」

美しい声を持った、柔らかい茶色の長髪青年。

白衣の裾が跳ね上げられた泥水で僅かに汚れていた。

「私立紋峯学園高等部1年B組、麻川アキくんですよね」

「あんた誰」

「紫月レイの兄です」

ふうん、すつこい簡潔だね。

その声に気付いたように、白石の肩がぴくりと震えてのろのろと
レイの兄が佇む自分の背後を見た。

「ゆづきせんせい」

白石の瞳が動き、白衣をとらえてほのかに笑った。

ちりん、と

微かな鈴の音。

「ユウヤくん、言ったでしょう。帰りは家に寄りなさいって。この時期のキミはとくに不安定なんですから」

「ファンテイ？」

「…今言っても駄目ですね」

ちりん

ちりん

ちりん

ゆづきという名前らしいレイの兄は苦笑して、懐から銀の鈴を取り出した。

ちりりりりん

ちりりりん

ちりりりりりん

数回激しく鳴らすと、あからかに不自然に白石の体が硬直した。

ちりん

ちりりりりん

ちりりりん

「や、止めるよ。止める！」

思わず絶叫するように叫んだ。

目を見開き硬直する白石の目から、雫が零れ落ちた。

ちり——ん

「…っ、あ、あ…あ・れ？」

「ほら、ユウやくん。なに寝ぼけてるんですか、風邪ひきますよ」

「うわ冷っ！何なんで俺ここにいるんだっけ」

「アルツハイマーですか」

「そうかもしれない」

がしがしと髪を撫で回す白石の顔に、涙の痕跡はもうない。

「とりあえず傘をかしますから、僕の家でお風呂に入ってください」

「ういーっス」

ゆづきが左手にかけていた赤い傘を受け取ると、白石はだるそうに歩き出す。

追いかけなかった。

ゆづきに、聞きたいことがあった。

「記憶、ないんですか」

「そう」

ふうと軽い溜息をつくとき、ゆづきは言った。

「人格障害者なんだ」

愕然と黙り込む。

全てに合点が行くというのに、その可能性を考えていたのに。ゆづきは俺の肩に軽く手を置き、顔を近づけて耳元で囁いた。

「それでもきみは、彼が好きかい？」

赤い屋根の家。

暗い曇天。

青い傘。

青い空を見たいと望むときに、いつも雨だと悲しそうに呟いたあいつ。

430円の安い青でいいなら、俺がいつでも青空にしてやりたい、と思った。

いつだったかなんて、もう忘れた。

雨が降る空の下で、

俺はゆっくりとひとつ、うなずいた。

「たっけー」

重い鉄の扉の向こうで声がする。

「サファイアみてエな空だなあって俺ポエマー？」

確かにあんたはポエマーかもね。

青い空が目染みる。

ぬるい空気が飛びこんでくる。

あんたは覚えてないだろうけどさ、

俺はあの時から、あんたのことしか考えてなかったよ。

23 . 　いつかの雨の空の下（後書き）

< b r > 本編にいれようか番外編に入れようか迷った末に本編。
< b r > ちよつと以外なことが発覚。 < b r > 原因はいろいろある。
< b r > 榆月先生はユウヤの主治医。フルネーム榆月セイヤ。婿養子。
< b r > < b r > < b r >

24・血液型・B型 上

僕たちは考えながら生きている。

僕たちは感じながら生きている。

僕たちは疎外を怖れながら生きている。

僕たちは死を恐れながら生きている。

僕たちは必死で生きている。

僕たちは必死で死んでいく。

この手に握めたもの全て、護りきれるとでも思ってるの。

血液型・B型 上

暑さも大分和らぎ、

と言いたいですがちつとも和らぎやしません。

っていうかむしろ今がピークです。

なんだろ今年の太陽、ホント頑張りすぎてますヨ。たまには有給とれ。

「おつハヨーさん。もう御機嫌斜めを通り越して垂直ですね麻川氏」

アキの顔にはものすごい疲労感つつかもう悲壮感。

「あんたは朝からテンション高いね。ウザイ」

「冷たいこと言うと僕ちゃん拗ねますヨ」

「キモイ」

はぁ、とホントに機嫌悪そに溜息つく。アラやだホントに不機嫌絶好調？

なんでかとかそんな野暮なこと聞きません。

知ってるから。(爆)

「『学園アイドルナンバーワン』」

どさっ

荷物おとしたよ、思いの外過剰な反応を見せましたねクールな君に似合わず。

アキが鞆拾って無言で靴箱に手を伸ばす。

開ける瞬間を見計らって続きを読み上げて差し上げよう (止めれ)

「『第一回学園アイドルナンバーワンコンテスト・王子の部1位、綾峯学園高等部2年麻川アキくん』」

がさどさばきぐしやめしやどしやぱりかこんどんがんばこぼこっ

さながらアキ誕生日リフレイン。

素敵に簡易雪崩が起きてピンクカラーのやたら多いプレゼントやら手紙やらがアキの足元に溜まった。

靴箱開けたまんまのかっこで止まってるアキ。あっそんなさながら梅雨のナメクジ並にじっとりした目でにらまないで下さい！

カラーの見開きばーんと使ってジャニ系アイドルもびっくりの爽やかオーラを振り撒くアキがでっかく斜めに。

目の前にいて不機嫌オーラ振り撒く人と同一人物とは思えませんね！

余談ですが全国女子高校生御用達の雑誌はついさっきレキから押しつけられマシタ。

なんか「ランキングなアキが彼氏で弟が熾堂リナで10:24分がトップに生徒会長でおいでませ！」とか叫びながら俺にぶつけていきました。

全訳：お前の彼氏で俺の弟でもある麻川アキがランキングトップ

やでつていうか10：24分までに生徒会長・熾堂リナに会わなあかんけこれだな！

まあね、人間伝達手段は色々あるけどね、省きすぎ。

「オメデトウ、全国紙じゃないですか。もう芸能界入りは決定しました？」

「どーもそれはない」

「ちなみに2位は熾堂生徒会長ですヨ」

「そーですか…」

「3位は長崎の兄崎カヲルくんです」

「誰…」

「二枚目ですヨ、背高めで。ほれ」

「…確かに」

「こいつを抑えるとはやりおるね麻川氏と会長」

「はあ…」

「『京都の綾高はチョーレベル高いヨ、Ｙｏチェックすべし』って書いてある」

「何の」

「男のでしょ、ねえこれって俺も含まれてると思う」

「少なくともそれだけはある得ない」

「まあ傷つく。そしてきみの兄上のレキが最終候補に残ってますよ」

「それはまた趣味の悪い…」

「ダブルでおめでとうですね！」

「どーも…」

律儀にプレゼントとかレターを集めて鞆に詰め込む麻川氏。

そこに集まる視線視線視線。

あれですよ、ラヴヴィームです、熱い上に俺にくるのはイタイです。

まああれだしね、俺に来るのはズエラスーストームだけだしね。それにしてもこの雑誌発売日昨日のはずなのにこの広がり様、メディアの力は恐いね！

じつと視線に我慢して鞆に諸々詰め終わったアキが顔をあげる。

「」

「」

「…俺、帰る」

「は、え！？なんで」

「駄目だ、帰ってもウザイのいる」

思いなおして自己否定。

ああ、つまるところ

「あれですか、取材」

「あとスカウト」

「電話が鳴り止まないと」

「留守録メモリーパンク」

「うわ」

「安眠妨害されて最低。ちょっともういい加減にしてほしい」

それで朝から御機嫌垂直なわけだ。

その上この視線にさらされてちゃね、ドンマイ！

「あんたあんま励ます気ないだろ」

「まあね！だってぶっちゃけ他人事だしね！」

「それならそうと早く言ってくれば俺もためらわずに殺れたのに

（にっこり）」

「（ヒイ）」

寝不足のせいですかいつもより過激ですね、にっこりにも生気がありませんそれでもイケメンなんだからもう何、麻川氏あんたは黄金比率のカタマリですか？

「で、サボりますか」

「…いい、なんかもうそれすらもめんどくさい」

「じゃあ教室行きましょう」

ほんと軽く肩に手を置くとブーイングの嵐。まあ煩い。

ふとアキの目線が俺の足元へ。

「靴、履き替えてないよあんた」

…目聡いですねホントにきみわ。

靴箱開けたらどうなるかなんて考えなくてもわかりますよいくらアホの子の俺でもね！

「麻川氏が開けるんなら履き替えてもいいんだけどねエ」

「…ああ、そっか」

「そうなんです。今日はお客様スリッパにしとくしかありませんヨ、アキ軟錠とか持ってない」

「あるけど」

「まじでか」

「っていうか、何で。」

俺もこれ以上処理しきれないもらい物するつもりないから。

麻川氏は相変わらずクールに言う。

乙女ゴコロにポティブロー。痛た。

とりあえずアキにもらった南京錠で鍵をした。

背後から「ちっ」とかって舌打ちが聞こえた気がしました。

女の子は怖いねえ。

五割り増し。

何が？

「中傷文ってヤツですよ」

机に書かないだけ小学生より進歩してます。

ただし引き出しの中にわさわさ。これが札束ならどんなにいいことか。

オレンジサワーの中にいるような生ぬるい橙色の教室に独り。

実は今日独りになったのこれが初めてです。

人気者なわけではなく。

ほんとね、俺の友達はいいいヤツばかりなのです。

アキの偽彼氏になったときから偏見のHもなく、ごくごく普通に付き合ってくれてます。

女子までそうなんだからホントすごいよね。

ああ、なんか単にオタクと呼ばれる人種が多いただけかもしれないが。

それでもステキだよホント、愛してるぜ2-C！

放課後もなにやら最近サッカー部員と化しつつあるアキと一緒に待つてくれると言われましたが、さすがにそれは断りました。

でもねえ、世の中そうでない人のほうが多いんですよ。

『キモいんだよホモ！麻川くんを返せ！』

『キモとホモで韻踏んでる、高等テクニクだなー』

『調子に乗ってんじゃねえぞ、手前の顔なんて十人並なんだからよ！』

「ほうこれはお嬢に指紋鑑定キットでも借りてそのツラ拝みに行きますかね。レキの筆跡鑑定でもいいけど。っていうか素直にブスと書けばいいものを」

『死ね！』

「ストレートだー……」

こうやって自信がないヤツとかは文字で相手を傷つける。

逆に中途半端にプライドがあると。

「あんたが白石ユウヤ？」

逆光で顔は良く見えませんが、スカートはいてること色からして三年女子ですね。

しかも一人じゃなくて複数名ですね。

丸めた中傷分をゴミ箱へ放る。

教室のドアに当たって、軽い音をたててゴミ箱に落ちた。

「そうですけど何か」

その行為が挑発的に見えたらしく、先輩方はこっちをにらみつけてきた。

見えないけどわかるんだよね、そういうの。

OK、いいよ。

受けてたちましよう。

24・血液型・B型 上（後書き）

遅くなりましてすみません。

励まして下さった方、ありがとうございます。

停滞ぎみなのはKの個人的な事情で…（最悪）PCに触れない状況下にいるためです。

関係ないですが、最近アキの人氣がスゴイです。

もうKもどうしたらいいかわからないくらい人氣です。

どうしたことが、どこがツボなのでしょううあんな腹ぐげふげふ。

いえ？好きですよ腹黒策士。

また次ぎの話をあげるまで間が開くかもしれませんが、気の長い方だけ待ってやって下さい。

25・血液型・B型 中-A

ああ、痛いな。

言葉が痛い。

敵意が痛い。

もしかしたらと思う、

心が痛い。

血液型・B型 中

・
A

「何コイツ、男の癖にされるがまま？」

がつんと壁にぶつけられた肩がじりじりと痛む。

ってか痛い、ホント痛い。髪ひっぱるなよ。

「聞いてんの？」

「あー、あんまり。今考え事してるンで」

「ッ、ふざけんな！」

「ふざけてないです」

腹蹴らないで欲しいなとかぼんやり思いながら、繰り出されるバ
イオレンスを受け流す。

こぶしも、痛いんだけどね。

張り手も、痛いんだけどね。

何よりも、

「あんた、ホントむかつかつ…！」

「ほんとなんなのよ！何でアンタみたいなのがアキくと付き合う
の！？」

「どうしてアキくんが男なんかとッ」

それは俺も訊きたいんですけどねえ。

いまいちはずきりと答えてくれんのですよあの人。

おねーさんA（茶髪を耳の上でくくってる）がスカートのポケッ
トに手を突っ込んだ。

あ、ちよつとヤバめ。

案の定というか何と言うか、出てきたのは握り手がこてこてに装
飾されたはさみ。

…カッターじゃないだけいいかな。

先っぽ丸いし。

Aがにやにやしながらこつち来る。

あー、邪なこと考えてる人は男も女も醜いねえ。

頭の後ろでばつんと言う音。

髪の毛掴まれて浮いてた頭が落っこちる。

頭、なんか軽い。

「…あれ、もしかして髪切った？」

「アハハっ！いい気味、アキくんは長髪が好きなんだよーッ」

へえ、そら知らなかった。

こんど髪の毛の長い着せ替えジェニーちゃんでもプレゼントしたろ。
多分着き返されるけど。

ってかそれから3日間くらいシカト？みたいになるのは必至だけ
ど。

「散発代浮きましたわ、どーも」

へらりと笑ってそう言うのと、おねーさんBの顔が悔しそうにゆが
んだ。

Aの手から放された髪の毛が頭の上からばらばらと降ってくる。

これ、片付けんの俺？

だよ。

でもめんどいし。

明日の当番だれだっけねえ。

…あ、カオルだ。

じゃあいいや、まかせた。（マテコラ）

がん、と頭を蹴りつけられる。

まだ甘いなあ、楡月っちの蹴りっつーか張り手は首ねじ切れそう
になるべ

「あんた、ホントむかつく」

知ってる。

だって自分が一番むかつくもんさ。

「…ねえ、あんたたち俺がにくいんでしょ？」

ふうつと問いかける。

Cだけが気味悪げに顔を潜めたけど、残り二人は嬉しそうに口早
に言った。

「そうよ！だいっきらい！」

「あんたなんかいなくなればいいのよ！」

「うん、俺もそう思うんだよね。だからさ、殺してよ」

顔を持ち上げると、おねーさん2人は顔を潜めていた。

Aの手を取って首元に持っていく。

「これをさー、ちょっと力入れて突くだけでいいんだよ?」

すらすらと言うと、手がこわばったのがわかった。

ほら、うざいとか嫌いとかいなくなれとかいえるけど、自分の力で消すことなんて出来ない。

「…何、あんた」

「憎ければ、殺せばいいじゃん」

「ッ、うるさい! 何よアンタ、きもちわるい! 死ねよ!」

死ねって言うくせにね。

自分では殺せないくせにね。

気がついたら視界が変わってた。

Aの上に馬乗りになって、いつの間にか取り上げたはさみを首に突きつけていた。

Cは半泣きで逃げてく。

あ、残念。こいつらの友情ここで終わったわ。

「ねえ、おねえさん」

自分の声が、どこか遠い。

「そんなにぼくがにくいんなら、ぼくのいないせかいにいけばいいでしょ?」

俺に死ねというのなら。

「ひとにしねっていうんなら、あんたがしんじゃえばいい」

ぐぐ、とはさみのさきっぱを首筋に突きつけると、突然頭の後ろから衝撃が襲った。

俺の背中を蹴り飛ばしたBがあわただしくAを支えて、「覚えてるよバーカ!」とか芸のない捨て台詞を言って去っていった。

はさみ、おいてったし。

今何をやるうとしたか、なんとなくわかってる。

わかってるよ。

だけど今更。

今更、もうひとり殺したくらいで。

突然、空が見たくなつた。

25・血液型・B型 中・A（後書き）

少々ですすみません。

終わりが見えませんこの話。

嫌な予感と言つものは、常に的中する。

血液型・B型 中 B

「うざいよねー、なんでアキくんがホモみたいになんなきゃいけないわけえ」

「そうそう、あんなどこにでもいそーなぼさつとした感じの」

「あ、あたしこの前アイツが鳥の死体抱いてるの見たよ!」

「うわキモっ!ヤバくない?」

低レベルな会話が空教室から聞こえてくる。

俺がそこに入ると、会話がぴたりとやんだ。

「こんにちは」

笑いかけてやると佇む同級生女子二人は安心したように曖昧な笑みを浮かべる。

「アキくん、部活終わったの」

「サッカーはまだだ。今日は早めにあがり」

「どうして？」

「迎えに行くから」

空気が僅かに刺々しくなる。

誰を、とまで言わなくてもきつとアンタたちにはわかってる。

わかってるからそんな渋い顔するんだろう。

「ねえ、アキくんはどうして男と付き合ってるの」

「男が好きなの？」

わかんないだろうね、アンタたちには。

別に分かって欲しいとも思っていないけど。

「男は、別に好きじゃない」

「じゃあなんで？」

「アイツさ、キモイよ」

「そうだよ変人だよ！」

「どうせあつちから告白されたんでしょ？」

「さっさとふつちやいなよ」

マシンガンのように繰り出される言葉の数々を、俺は黙って聞いていた。

その態度に安心したのか、益々内容が過激になる。

「ホモは白川だけで十分だよ、アキくんまで巻き込まれることないじゃない」

「そうだよってかあいつおかしいし」

「だよー、傷つかないじゃん」

傷つかない。

僅かに、自分の腕が動くのを感じた。

「…傷つかない？」

「そうそう、先生に怒られても平気そうにしてるしさー」

「今日だってかなりイヤガラセされたはずなのに、一人で教室にのこるしねー」

「馬鹿なんじゃん」

「はは！言えてる！」

「だからさー、そんなやつさつさとふ…」

「傷つかないってどういうこと」

冷たい沈黙が降った。

俺がまだ笑っているからか、唇がてかてかした瞼が異常に濃い色の同じような顔のニンゲンは何も気付かずに「だからあ」といった。「ひっでえこと言われてもぼんやり笑ってんだよ、キモイよあいつ」「気持とかそんななんじゃないの？ありそうだよねー」

「ああ、そういえばね、私たちじゃないけど」

ああ、本当にコイツらは馬鹿だ。

私たちじゃないけど、なんて前置きを聞かせることに、一体なんの意味があるんだろう。

「死ねとか、結構言われてるんだよ？でも平気そーなの」

「マジで死んじゃえばいいのにねー」

アハハハハ。

その笑い声があまりにも禍禍しいから、遮ってやりたくなった。

バアアアアンツ

女たちの顔から笑みが消える。

「ひとつ、訂正しておこうかな。本当の告白したのは確かにアイツだけれど、俺ほうがずいぶん前からユウヤのことを目で追ってたし、付き合おうって言ったのも俺だよ」

わかりすぎるほどわかっている。

こういう想いは万人に受け入れられるほど癖のないものじゃない。俺は、認めてもらいたいとも思っていないけど。

けれど、これだけは。

「傷つかない人間なんていない」

拳を叩き込んだ窓ガラスには、蜘蛛の巣のように白いヒビが走りまわっている。

強化ガラスで良かったと、ぼんやり思った。

傷つかない人間が、あんな風になるわけがないと。

繊細すぎるほど繊細でないと、心を壊すまで傷つくことなどできないと。

少なくとも、俺は。

「傷つかない人間なんて、いないんだ」

思いがけず優しい声で、笑いながら言う。

けれどもそれがどれだけ恐ろしく見えるか、彼女たちの見にくく歪んだ顔がそのまま写してる。

ひゅつとどちらかが鋭く飲んだ息の音を皮きりに、二人は我に帰ったように慌てて逃げ出した。

割れたガラスでできた細かい傷から血が伝い、窓の下に小さな赤い水溜りを作っていた。

舌先で舐めるとちりりと強い刺激が走る。

「痛い、な」

ただどあいつの痛みは、

きつと、こんなもんじゃない。

虚ろな瞳で青空を望んでいたあいつに、笑って欲しいと思った。いつもみたいな適当に誤魔化すような、曖昧な笑みじゃなくても、こういう時に護れもしない俺にそんなことができるのかと思うと、少し泣きたくなった。

違う。

男だからじゃない。

好きになった「白石ユウヤ」がたまたま同性だっただけの話なんだ。

それだけで、それ以下でもそれ以上でもない。

血は止まらずに小さな水溜りを作りつつける。
そろそろ迎えに行かないといけない。

多分、アイツも闘ってるだろうから。

26・血液型・B型 中・B（後書き）

B型なのは誰なのか。
多分次でわかるはずです。

27・血液型・B型 下

そりゃ、都合のいい事ばかりな世の中なんてないって知ってるけど。

血液型・B型 下

「何やってんの」

「考えてるんですヨ」

「嘔吐かないでくれる。目が逝ってる」

「斧の高村にサインをもらいに」

「悪いけどその発音じゃ正しい人名浮かんでこない」

アキと初めて会った場所で、ぼんやり佇む俺。

空は明るいオレンジ色で、見方によっては血みたいに赤い。

「…ってというか麻川氏手怪我してない？」

「ああ、さつき強化ガラス割ったから」

「は！？何それどんな腕力麻川氏細腕に似合わず！」

「おとすよ？」

「スンマツセンでしたー！！！」

「つていうかあんたも髪がない」

「止めてよその言い方禿げたみたいない気分になるから」

「何で」

「（スルー！？）嫌気分転換に切ってみたら失敗」

「あんたつて嘘へただよね」

「…否定はしません」

「つていうか、俺そんな下手なつもりないんだけど。」

麻川氏が見抜いちやうだけの話で。

このちよつと勘がよすぎる男には時々嫌気がさしちゃうNE

「何があつたかなんて大体予想つくけど」

「さっすが麻川氏！天才！」

「馬鹿にしてる」

「いやまさか」

とりとめのない会話を繰り広げながら、俺が思ってることはただひとつ。

人殺しは、人を愛せるのか。

愛していいのか。

「…ねえ。落ちる気？」

思わずフェンスから身を乗り出そうとしてた俺の隣で、アキは俺と同じ様な体制で下を見つめていた。

「麻川氏も落ちる気ですか」

「あんたが落ちるならね」

「魅力的なお誘いですね」

「そうかもね。とりあえずあんたが落ちたら俺も落ちるよ。つまり

なくなるから」

「キミの生死の基準はつまらないかつまらないかなんですか」

「そうだけど」

そうデスカ。

そのまま会話もなく、段々と濃くなっていく夕日を見つめる。

「ねえ麻川氏。俺どうしたらいいかなあ」

唐突な質問なのに、アキは何も聞かない。

何も聞かずに、答えた。

「何もしなくていい」

「うん、でもさ」

「俺がいいつつたらいいんだ」

「（ワオ天上天下唯我独尊）」

それは本当に唐突だった。

俺は夕日に洗脳されてとてもぼんやりしていたから、アキが動いたのに反応するのがとても遅かった。

首の後ろを鷲づかみつつても差し支えないくらいの力で掴まれて。

痛いですがとか言う暇もなく、唇に何かが掠った。

確かめようと目をしばたいたら、アキはもう何もなかったかのよ
しな顔で夕日を見る。

「あれ、今何したの」

うつわ俺間 抜け …… ！

絶対馬鹿にされるぜこれ末代までの恥だねどうするよチエキ

アキはでも、馬鹿にするでもなく、ゆっくりと唇を開いて言った。

「わかんなかったんなら、もう一回してみる？」

抱き合うなんて大げさじゃない。

ただ、お互いの体を密着させた。

腕が背中に回りあうこともない。

熱すぎなくて、寒すぎない。

唇が触れ合う。

ほんの少しの間だけ触れ合って、すぐ離れる。

「僕ちゃんファーストキスだったんですけど」

「俺もだけど」

「嘘吐け超手馴れてたじゃん！」

「生憎と本当なんだよね」

腕がほんの少し触れ合った。

お互いの肘を握り合う。

掌に小さな脈が伝わった。

「殺人犯は人を愛せるでしょうか」

ふと零れた疑問に、アキは小さく笑った。

「償えない罪はあるけど、人を愛しちゃいけない人なんて聞いた事がない」

アキは過去に俺が何をしたのかを知らない。

俺はアキが何をどこまで知っているのか知らない。

知らない事だらけで、密着し過ぎない。

それは別れる時に痛みを伴わない、俺が身につけた賢い生き方で、そうやってアキとも接してきたつもりだったのに。

「俺は思ったよりもずっとアキが好きなのかも知れません」

「あんたね、何回同じ事いわせれば気が済むわけ？今更だ、そんなこと」

確信犯めいたアキの笑みに、俺コイツにはぜってー勝てないなんて当たり前のことを再確認させられた。

アキの体温は低くて、テンパって体温高くなってた俺の体に気持ちよかった。

アキの唇は温かくて、青ざめていたのか冷えていた俺の唇をあたためた。

その後

「ああ、言うの忘れてた。俺B型だから」

「え！？嘘アキファン必読の「アキ殿下瓦版」じゃアキはAB型って…！キーツ、この瓦版ガゼネタ撒きやがった！」

「あんたそれ読んでるの」

「いや拾った」

「（…）俺は間違いなくAB型なんだけど、今2年の階にある空き教室のガラスが割れてるんだよね」

「割ったんだよね！」

「うんそう。で、その際に血が散乱してるから」

「え、血って卵産んだっけ」

「どうでもいいボケかまさないでくれる。とにかくそういうわけで、サキに血液検査とかされると面倒だし」

「お嬢そんなことまでできちゃうんですか…。っていうか家族だからそんな嘘通用しないんじゃない」

「保健書見せ合ったことないから多分知らない。俺も教えてないし向こうの正確な血液型もしらない」

「ふーん、そっか」

「だからあんた今日俺の保健書拾ったことにしといて」

「了解しましたー」

「…っというかさ」

「はい何」

「保健書に血液型なんて書いてないよ」

「マジで！！？」

「（馬鹿だ…）」

27・ 血液型・B型 下（後書き）

麻川氏せっかく珍しくボケかましたのに、突っ込みのほうの頭脳が
ついて来れず。
遅くなってすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0706a/>

走る僕らの青春コード

2010年10月11日18時09分発行